1998年2月1日発行（毎月1回1日発行）第6巻第10号（通巻60号）1992年12月15日第三種郵便認可

特集　女性と表現Ⅱ

東と西の表現
＜即興＞パフォーマンス体験記
稲邑　恭子／大沼もと子

「同じ」への疑問
—フェミニズムとりんごをめぐって
堀田　碧

Colors of Englishとわたし
朴　和美（パク・ファミ）

We

23
1998

くらしと教育をつなぐWe

女と男の家庭科新時代

"Colors of English"

ーフェミニスト英語中級講座へのお誘いー

英語圏の白人中産階級が使う英語を自明視することなく、さまざまな歴史・文化背景を持つ女たちと出会い、思いを分かち合いつながりあうための共通語として、そして自分を表現し解放させるための手段として英語を学びたい人のためのクラスです。９６年９月に開講し、多彩なゲストの講師たちと、世界のさまざまな出来事を学んできた「カラーズ・オブ・イングリッシュ」は、カラフルな文化が交差する中、そこに集まった女たち全員を、知らぬ間にエンパワー（元気に）してしまうという不思議な空間になっています。

今学期は新しい試みとして、黒人女性作家ベル・フックスの本"Bone Black"を題材にディスカッション（discussion）、ドラマティック・リーディング(dramatic reading)、パフォーマンス(performance)、ロール・プレイ（role play）、クリエイティブ・ライティング（creative writing）などに挑戦します。また、本の中の一つの章の日本語への翻訳も行います。

中級講座

フェミニスト英語講師として経験豊かな講師がそれぞれの個性と特性を生かし、下記の部分を担当します。

- ９８年２月６日（金）～４月２４日（金）
- 全１２回／定員１５名
- 受講料（12回前納）25,000円（６回前納）15,000円
- 毎週金曜日７：００～９：００PM.
- 東京ウィメンズプラザ（地下鉄・表参道駅下車徒歩５分）

●講師プロフィール

◎ Discussion 担当 **Debbie Lunny** デビィ・ラニ

マッギル大学で東アジア研究の学士号取得。シカゴ大学で日本文学の修士号取得。在日６年の間に女性のためのＮＧＯと草の根活動に参加し、北京女性会議に通訳として参加。現在は、慶應大学と中央大学の英語講師。

◎ Creative writing 担当 **Carol Hui** キャロル・ホイ

カナダのブリテッシュ・コロンビア大学社会学部で「性、人種、経済差別」を専攻。「ジャパン・タイムズ」や香港、アメリカの英字新聞記者を経て、現在フリージャーナリスト。英字雑誌「アジア・マガジン」の東京特派員、「ジャパン・タイムズ」のコラムニストとして活躍。

◎ Dramatic reading,performance,and role play 担当

Cheiron McMahill カイラン・ミックメーヒル

ジョージワシントン大学日本語学科卒、ワシントン大学大学院英語教育学部修士課程卒業。現在、群馬県立女子大学英文科講師。ＷＥＬＬ（女性語学教育学会）を設立し、語学とジェンダーを研究。

◎翻訳担当・コーディネーター ／朴和美 パク・ファミ

ニューヨーク州立大学オルバニー校社会学科卒業。現在、日本の企業で翻訳業務に携わる。共著に『朝鮮人女性が見た「慰安婦問題」』（三一書房）、共訳に『性の女性史』（現代書館）等。

お申し込み、お問い合わせはフェミックスまで

フェミックス Tel／FAX ０３－３４２４－３６０３

９８年2・3月号　くらしと教育をつなぐ We

◆ 特集　女性と表現Ⅱ ◆

連載

● おんなが歳をとるということ　木村　栄 ……45

● シネマの魔　武田　秀夫 ……46
雪の日に――ケン・ローチの「ケス」について

● いきいきごんぼ　桑田　良彦 ……50

● 変な子じゃないよね　滝野澤直子 ……52

● このままではいけない？　吉原　令子 ……54
――留学で見えてきた母との関係(2)

● 蔦森樹の巡業日記　蔦森　樹 ……56

● 居場所考 34　水田　宗子 ……57
――丘の上の家

◇ 映画「ナヌムの家 Ⅱ」 …… 29
◇ We夏季フォーラム97 分科会報告② …… 60
◇ We関西の会から …… 62
◇ We夏季フォーラム98実行委員から …… 63
◇ 編集後記 …… 64

表紙、タイトルデザイン、カット／川口民子

くらしと教育をつなぐ We

1998.2/3　自立した女と男を

特集　女性と表現Ⅱ

★東と西の表現
＜即興＞パフォーマンス体験記
稲邑　恭子／大沼もと子　……4

★「同じ」への疑問
—フェミニズムとりんごをめぐって
堀田　碧　……16

★Colors of Englishとわたし
朴　和美　……23

女と男の家庭科新時代

■ フェンスを越えて　小平　陽一 ……31

■ 私の家庭科 ラフスケッチ　立山ちづ子 ……32
——共食は、共育、そして共生を促す

■ 家庭科 風がかわる匂いがかわる　永松　藤乃 ……38
——「から芋餅」作りで地域を感じる

■ 楽市楽座　加藤　昭仁 ……42
——ビデオ(TV)「豚のＰちゃんと32人の小学生」～生命の授業 900日～

■ オホーツクの潮風荒く　江口凡太郎 ……44

特集　女性と表現Ⅱ

★東と西の表現

〈即興〉パフォーマンス体験記

稲邑　恭子／大沼もと子

はじめに

稲邑　恭子

この一、二年、婦人学級の講師を担当する機会が増えて、女性問題の学習が、〈啓蒙〉から、〈自己表現〉へと転機にさしかかっていることを感じるようになった。男女共同参画などという言葉が括弧付きではあっても行政のレベルで語られるようになり、性別役割分業などジェンダーをめぐる学習はかなり浸透してきたような気がする。でも、そのことがどれだけ、女の人たちが抱えているもろもろのしがらみから自分を解き放つ力に結びついてきたのかと問われると、まだまだこれからと思わざるを得ない。女性問題の学習をして、自分の置かれる状況が見えるようになって、それを打開する手だてが見つからないでかえって苦しくなったという声も届いてくる。

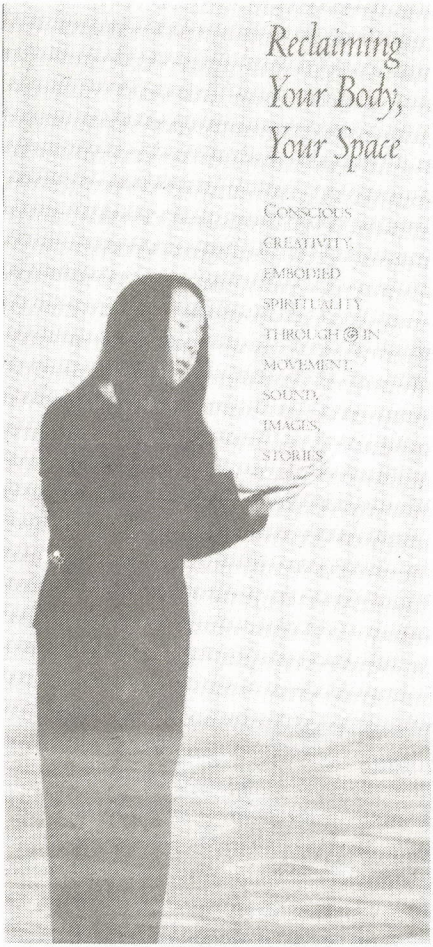
七〇年代後半以降の日本のフェミニズムが、米国のジェンダースタディーズの紹介から、いわば女性学という学問の紹介として始まったことを思えば、欧米のフェミニズムが草の根で広まったときに出てきたCR（コンシャスネス・レイジング／意識覚醒運動）のような動き、つまり、自分の思いや感じていることを出しあって仲間で語り合う〈場〉づくりを伴わずに来てしまったのは当然のなりゆきだった

ろうと思う。

そうであるがゆえに、これからは、自分の感じていることをありのままに表現してそれを受け止め合うことのできる〈場〉を、その中で自分自身も仲間の多様性も受容し元気になっていくことのできる〈ゆるやかな場〉を作っていくことが次の課題になっていくだろうし、それにはたとえフェミニズムの名のもとであろうと、〈正しい理論〉を無前提に置くことはむしろ妨げになるだろう。〈誰も誰をも代弁できない。誰も誰にも代弁されない〉と言うのがフェミニズムのスタートだったはずだから。

そしてそのためには女性が自分を表現していく助けになるような表現の回路を多岐にわたって探していきたいし、また日本人女性が特に苦手とする「自分がなにをやりたいかを明確に表現していく力」をどうつけていくのかという方法も模索していきたいと思っていた。

そんなことを考えているとき、フェミックスの英語講座やワークショップの講師だったテレサ（97年2/3月号参照）から紹介されて興味を持っていた、カリフォルニア州オークランドで〈即興〉パフォーマンスのワークショップを開いている日本人女性西尾友さんが、お正月に一時帰国するという話を聞いた。昔の演劇仲間に頼まれてプライベートなワークショップを年末に開くというので、女性の表現、そ



西尾友（にしお・とも）さんは日本での演劇活動ののち、88年に渡米し、ダンス、演劇、音楽、道化など多岐にわたるジャンルの<即興>に挑戦。89年よりルース・ザポラのもとで、アクション・シアターを学ぶとともにサンフランシスコで即興パフォーマンスを行う。94年、アクション・シアターの指導を始める。また、即興を自己発見のメディアとして用いる独自のワークショップを開催。現在はパフォーマンス活動は休止して再び演技（スタニスラフスキー・システム）のトレーニングに励む日々を送っている。

して長年私のなかのこだわりでもあった東と西の表現のちがいについてのヒントがもらえるのではないかと思い、早速参加した。

即興パフォーマンス体験記

稲邑　恭子

■自分の内側に入る

西尾さんによると、同じ〈即興〉のパフォーマンスでも自分の内面を探っていくものと、他者とのコミュニケーションに焦点を当てていくものと双方向のアプローチが可能という。

初日は内面を探求するワークショップだった。

まずはじめに、深呼吸しながら自分のからだを感じ、気になる箇所を見つけてそこに注意を向けていく、そしてその部分が「どうしたがっているのか」を探してあげる。

次々に段階を踏んで、最後にやったのは〈エンプティ・スペース〉。部屋の中央に能舞台のような空間を作るために、茶筒で象徴的に四隅を作り、そのスペースに入る前、入った直後、真ん中に来たとき、出る直前、出た直後と、それぞれの地点で自分の体の中で何が起きているかに耳を傾け、それを意識しながら、その声に従って動いていくというものだった。

果たして〈からだからの声〉なんか聴けるかしらと不安を感じながら入っていったが、熱いものがからだの中からわき上がってくる感じですっと動く。

西尾さんから「今日のメンバーはすっと入っていけてすごいですね」というコメントがあった。アメリカですときはもっと導入に時間をとらねばならず、何のためにやるのかという意図を理解してもらうために、懇切丁寧な説明が必要という。

そういえば、欧米で箱庭療法の研究会をやると、黙って感じ取るのをよしとする日本流に比べ、とにかくああでもないこうでもないと侃々諤々と論じ合うということをユング派のカウンセラーから聞いたことがある。また、別のセラピストが、ワークが終わってシェアリング（感想の交換）をすると、アメリカ人は自分がいかに特異な体験をしたかということをこれでもかこれでもかと言い募り合うので、少し辟易するということを言っていたことを思い出した。

これは何かにつけ、感受したものを明確に言葉にしたりはっきりと目に見えるものにしていかなければ気のすまな

い欧米人と、ただ感受したまま意識化することなくいられる日本人との違いなのかもしれないと思う。

エンプティ・スペースに入った人が「温泉に入ったみたいな気がした」と発言したように、私たちは子宮に入ったようにからだが空間（環境）にすっとなじんでしまうし、自我とからだもすべてが融和しやすい傾向があるのだろう。

いままで日本人は意識化が苦手であるというマイナスの面ばかりに目がいきがちだったが、自我を緩ませやすいゆえに、無意識の部分からのメッセージを感受しやすいという、そのことはもっと大事にしていいのではないだろうかと思った。

■〈自己決定〉と〈自己表現〉を援助する

二日目のワークショップは他人とのコミュニケーションに焦点を当てたものだった。

誰かが動くと走りだし、止まると全員止まるというゲームで部屋中を走り回った後、〈コール・アンド・レスポンス〉というのをやった。まず二人一組になって、一人がする動きをもう一人がコピーしていくのをやってみて、次は二拍子のリズムをとりながら、言葉や音声で相手をコピーし、新たなものをつけて返すというのをやってみる。これはとっても楽しい。普段自分の生活や表現にいかにリズムがないかということがよく分かる。

次に試みた、三人一組になってお互いを意識しつつ自分の欲する方向に動くというのは、何となく動けてはしまうのだけど、「自分の中に何が起こっているのか」「自分がどうしたいか」を明確に意識しながら動きにしていくのが難しい。何となくふわーふわーと動く感じになり締まらなくなってきたなと思ったら、西尾さんがストップをかけて、どうしてそういう動きをしたのか、その人がいったいどうしたいのか尋ねて、無駄な動きをカットして、相手に伝えたいことがより明確になるような動きを選ばせる。

私も〈曖昧〉という潤滑油を使いながら〈気配で動く〉ことでは、典型的日本人。相手の動きに抵触しないように適当に距離を取り、そこはかとなく動いてしまうので、動きが限りなく曖昧になる。

ただ、西尾さんのワークショップに参加していて居心地の悪さを感じなかったのは、病がどこにあるのかを見つける〈トラウマ探し〉のワークショップではなく、人が何をやりたいのかを自分自身に聞いて、それを表現していくのを援助するいわば、〈自己決定〉と、〈自己表現〉を援助

するワークショップだったからなのではないかと後から気づいた。

日本では、病を探す心理療法的ワークショップや自分の内面に深く入っていって表現する舞踏などはあるが、このように他人とのコミュニケーションに焦点を当て、自分が何をやりたいかを意識化しながら表現し、相手に伝えていくというタイプのものにはあまり出会ってこなかった。

他者に対して融和的な傾向を持つ日本人にとって、自分と他者との間に境界線をはっきり引くこと、相手に巻き込まれないこと、ノーを言うことはとても苦手な課題だ。そのことができるためにと、フェミックスでも自己主張トレーニングに重点を置いて講座を組んできたのだが、今回、西尾さんのワークショップに参加して、これは自己主張トレーニングを言語でなく、からだ全体でやるようなものだなと思った。

内向的なワークショップをしたときにも感じたが、相手のからだの微妙な動きに注目してそれを増幅させていき、その人がしたかったことをみつけそれを表現させることで癒していくユング派の最先端のアーノルド・ミンデルの手法に通じるものがある。

言葉は意識化し、相対化して整理していくために大事な道具ではあるけれど、言葉でできることには限界がある。これからは、より深いレベルの気づきを得るために、からだに聴いたり、絵や造形、音などに表現されたメッセージを分かち合いながら、よりシンプルに明確に表現できるよう援助していくというのが、従来の西欧の伝統的な心理療法を超えた、新しい援助の在り方の潮流になっていくのではないかと思う。

思想や理論とは、本来直観や感情のレベルで無意識にキャッチしたものを意識化したものであったはず。それなのに、自分の現実をくぐっていない、どこかから借りてきた理論をもっともらしく語ることが〈理論的であること〉の証左とされてしまっているように思えてならない。

フェミニズムの理論もまたその例外ではないようで、それがなかなか個人を解放していく力になり得ないのも、個々人がそのプロセスを自分のなかでしっかりと体験する過程が抜け落ちているからではないかと思う。

〈何々であるべき〉といつも考えていると、そこから逸脱する都合の悪い感情にふたをすることになる。そうすると自己受容度は低くなるし、感情のキャッチボールも円滑にできなくなる。なぜなら自分の感情を貶めるということは、

かけがえのない自分の感じ方を信じられないということ、そしてそれは他人の感じ方も、その多様性も受け入れることができないということだから。自分の感情に根づいていない思考は百害あって益なしだと思う。

人間のコミュニケーションは、一説に拠れば、言語的なものは7％に過ぎず、声の調子などの音声的なものは38％、表情などによるものは55％と、併せて93％は非言語的なものが占めるといわれているくらいで（非言語が65％、言語が35％という説もあるが、いずれにしても）、圧倒的に非言語部分が重きをなす。

そうは言っても、はっきり言葉にしないで察しあって動いていると、少しでも勘が狂うとたちまち対人関係が泥沼化する。察して動くことを強要されることも、うっとうしい。相手に合わせることを暗黙のうちに強要されるような感じになり、怒りがたまってくるからだ。

非言語的なメッセージには敏感だけれど、明確な言語化が苦手な文化的風土にいる私たちにとって、自分と他者との間にはっきりとした境界線があり、ストレートな意志表示と感情表現が前提の欧米の思考方式やコミュニケーション方式を自分のものにするのはかなりの苦行である。

そうであればなおさらのこと、まず言葉での表現だけにこだわらず言葉にならない領域で、それを十分に表現しそれを分かち合いながら、明確な表現を鍛えていくという過程が必要とされるのだろう。

かく言う私も、〈はっきりさせること〉に弱いたちである。道を歩いていても、家事をするときも、ぼーっと無意識で動いていて、眼が開いているのにしっかりキャッチしないのでほとんど記憶に残らない。でも、これはいけないとはっと気づいて意識的にしようとすると、かえって勘が狂い、うまくいかなくなるのである。近年ようやくそのことに気がついてから、このままでいいのだと開き直れるようになったが、それでも意識化しろと言われると少しはひるむし、自立とか自己決定とかいう言葉があまり並ぶと息苦しくなる。

先日、ここ数年のケルト・ブームの火付け役になった鶴岡真弓さんの講演を聞いた。

ギリシャ・ローマの人々は、目に見える現象の世界を論証し、哲学や科学を発達させたが、ケルトの人々は徹頭徹尾見えないものを見、シャーマンのように死者や祖先からの〈かそけき言葉〉を聴きとり、優れた口承文学を残したが、あえて文字を残さなかったという。百年前のアール・

ヌーボーの動きは深くケルトに影響を受けて、ケルトの模様であった渦巻き模様、組み紐模様、動物模様などの有機的なカーブのフォルムを復活させたが、それは同時に、ヨーロッパの物事を分離し切り捨てるやり方への異議申し立てであったという。

ヨーロッパにもギリシャ・ローマとは対照的な文化があったということも新鮮な気づきで嬉しかったが、〈字はいわば「線」で伝わるものだが、闇や光やハープの音色などは「面」として我々に迫ってくるから、全身全霊で全体として感受するしかない。絵の中の一部分を見ると他が見えなくなるのは普通だが、ケルト人は絵の中の二つのものが同時に見えてくるような、「面」として感受するような見方を選んだ〉というようなくだりに来ると、自分のルーツを見つけたようで懐かしい。

西洋人は頭を考えでいっぱいにして人の話を聴くが、日本人は空っぽにして聴く（だから受信能力は勝るけど、発信することでは負ける）と言った人がいたが、人の話を深く聴くときは頭が詰まった状態でも困るし、緊張していても困る。半分ぼーっとして、半分覚醒しているような状態、意識と無意識の境界が緩み、行ったり来たりできるような状態がいちばん良く人の話が聴ける。

「あのときあなたがこう言ってくれたことが効いた」とあとから人に言われることがあるのだが、こちらは半分無意識で言葉を返しているので、忘れていることが多くて顰蹙を買うのだが、多分忘れているくらいのときのほうが気が利いたことを言っているのだと思う。

■リズムがある空間

「日本では過密な空間に住んでいるのに、〈気配〉を感じない。日本にしばらくいると、アメリカのリズムのある生活が懐かしくなる」と語った西尾さんの言葉が忘れられない。ワークショップの間中、彼女は「リズムを忘れないで、相手の動きもリズムで真似るのよ」と言い、動きの緩急をつけることで表現にメリハリをあたえるように注意を与えていた。

そういえば私たちのいる空間にはリズムが消えているなと思う。感情を抑制するように育てられるから、自然な感情の、そしてエネルギーの発散の回路が閉ざされ、息を詰めたような煮詰まった空間になってしまう。

先日、手に持ちきれないほど買い込んだ食料品を抱えて電車に乗り、やっとの思いで座って収まりきらない荷物を

まとめようと悪戦苦闘していたら、それを見て、同じく大荷物のとなりの女性が親しげに話しかけてきた。「主婦は大変ですね」「私は以前葛飾に住んでいて、たまに帰ると安いので先も考えないので買い込んできちゃうんですよ」とか、そういう他愛もない話だったが、都心とニュータウンをつなぐ、込んでいるのに少しでも触れると「自分のテリトリーを侵すな」という感じで冷たく押し返してくるような若い女の子によく出くわすような寒々しい路線なので、珍しい人に出会ったようで懐かしい気持ちになって、こちらも手にとりかけた本はしまってしばらく話をしていた。すると、前に立っている中年の男の人も陽気に会話に加わってくる。あまり親しげなので、はじめは彼女の連れなのかと思っていたが、どうもちょっと話がずれていてとんちんかんだな、あれっ？もしかしてと思いかけた頃、明るく挨拶をして途中の駅で降りてしまった。彼女に尋ねると彼女も知らない人で、「うーん、困っちゃって」と言う。彼はどこか心に障害を持つ人だったのだと思うが、後から思い出すとなんだかおかしくて、ほのぼのとしたものを感じた。

今読んでいる三好春樹の『関係障害論』（雲母書房）に、ぼけ老人同士がそれぞれ勝手に話をしていて、会話としてはちっとも成立していないのだが、「雰囲気が合っているので」居心地良さそうに一緒にいるというのが出てくるが、そういうコミュニケーションの在り方もまたいいなと思いはじめている。

欧米の、明晰さをあくまで追求し白黒はっきりさせずには気がすまない強迫的傾向がよしとしていきなり輸入されると、本来もっていたいい意味でのいい加減さやデリケートなコミュニケーションのやり方はひとたまりもなく潰される。

コミュニケーションに困難を感じて、放棄して内閉してしまう傾向や、こうあらねばならないという強迫的傾向が若年層を中心に年々強まるように感じるいま、ダイナミックでストレートな表出のしかたでなくてもいい、微妙なリズムでもいいから、とにかく呼吸を自分で感じ、お互いに呼吸を感じ取れるような、〈気配を感じ取られる空間〉、〈リズムのある空間〉を身の回りにつくりたいと思う。

受け身になることができ受信能力に長けていること、目に見えないものへの感度の良さや調和性があることなどの良さを生かしつつ、なおかつ自他との距離がきちんととれて、明晰になりうること、その一見相反する能力を同時に身に備えて使い分け、使いこなせるようになりたいと思う。

日本の空間の閉塞から飛び出して、アメリカの即興パフォーマンスの活動に飛び込み、その中で、自分の中の日本に気づいて、またあらたに自分の内部に向かうワークショップも始めた西尾さんの、東と西の要素をうまく統合したワークショップを体験して、それらの課題が自分の中でよりクリアーになってきたように思う。

（いなむら・きょうこ／フェミックス）

即興パフォーマンス体験記

大沼もと子

■からだとの出会い

振り返ればこの6年近く、さまざまな心理療法やワークショップに参加してきた。

最初はどうにもならない状態まで追いつめられてカウンセリングに援助を求めたことがきっかけだった。カウンセリングは「言葉」で抱えている問題に対処していくから、問題を明確化するのにはすごく役立った。限られた時間のなかで、じっくり話を聞いてもらい、日常の人間関係では得られない自分を映し出す鏡になってもらった。

でも、いくら言葉で考えてみても、自分が何を心地よいと感じるのかが分からなかった。いつも自分をテンションの高い緊張状態に追い込んできたので、リラックスするということがどういう状態で、どんな感じがするのか、皆目見当がつかない。その時はじめて自分のからだに出会ったといえる。

そこから始まった「からだ」へのアプローチは、私をさまざまな演劇や舞踏のワークショップに向かわせた。

どれもそれなりに得ることはあるのだが、長続きしない。どこに行っても自分のからだが一番硬くこわばっているような感じになって、落ちこぼれ状態。主宰する人が杖の一振りで参加者をリードしていたりすると反発したくなるし、場の雰囲気が深刻で重い感じだとそれだけで気持ちがよけい暗くなり、ついて行けなくなる。一番合っていたのが気功で、あまり努力もせずに気持ちよくなれるのが、根気のない私にはよかったのだろう。

今の楽な私でいられるようになったのは、からだで感じていることで動けるようになったからだと確信している。いやなことをしているとすぐに具合が悪くなる。すっかり無理のきかないからだになってしまった。でも、自分に正直になりいやなことをしなくなると、自分が見えてくる。

もともと人の注目を浴びることが好きだったから、何か表現したいと小さい頃からずっと思い続けてきた。でもそういうことができる人は特別の才能に恵まれた者だけとあきらめ、その気持ちにふたをしてきた。

表現とは他者を意識せずにははじまらない。天賦の才能と厳しい訓練の賜である、人に見せるための洗練された表現だけがアートとして評価されるが、そういうものとは別に、もっと広い意味で「私はこんなふうに感じている」というメッセージを表現できるような空間が日常で創り出せればどんなに素敵なことだろう。

実際、女性たちが限られた短時間の間にテーマに沿ってアイデアを出し合い、またたくまにダンスやオブジェなど、さまざまな意匠をこらしてものを創り出していき、今まで気がつかなかった自分たちの創造性に触発されて元気になっていく場を何度か体験してきた。

そこで起きるエネルギーの交換は、女性が自分自身の価値や力を信じる上でとても役に立つ。言葉ですくい取れない何かをアートを手段にして表現すると、他者とつながりやすくなるし、自分の中に眠っていた命の源泉が呼びさまされるような気がする。きっとこれが、アートの持っている不思議な力なのかもしれない。

私は厳しい修業や長期的な集中が続かないタイプなので、感じたことをその場でかたちにしていく〈即興〉はピッタリだと思っていたのが、トモさんのワークショップに惹かれた大きな理由のひとつだ。彼女独自の手法は、私の課題を明確化する上でとても刺激になった。

■内面的なワーク

〈エンプティ・スペース〉のワークには抵抗なく入れた。

四隅に置かれた茶筒で作られた空っぽの空間は、私の内部を映し出す象徴的な空間だ。私の目の前にあるスペースが、自分自身の延長としてつながってしまう。私にとって、この空っぽの空間はものすごくなじみのある世界だ。

空虚な世界。自分の深いところでずっとこの虚しさがあった。いつもこの虚しさを何かで埋めようとしてきた。それが食べ物や、浪費、仕事、強迫的な恋愛といろいろだったが、どれも埋めてはくれなかった。今はこの虚しさと一緒にいられる自分がいる。スペースの中心に立った時に感じた、自分の中心とつながっている感じは、気持ち良く、強烈だった。ここが自分の帰っていく場所、自分自身でいられる場所と信じられた。

私が身体表現におもしろさを感じるのは、「からだ」が「無意識」そのものを体現していて、「意識」の側からみると他者のように思えるからだ。でも、それは外側から自分の他者としてのからだを見ようとする西欧的自我のクールな眼差しではない。自分も空間の内側にいてからだを見ることの出来る柔らかい眼差しであり、どこまでも自分の内側とつながっている深い井戸のような空間の中にいる、「もう一人の自分」なのだ。だから自分と、「もう一人の自分」との間は親和的で、そこには無意識のメッセージが溢れていて、耳を傾ければ自分自身を知る手がかりがある。

■外向的ワークショップ

私には3人でグループを作り、それぞれの人たちを視野に入れながら立ったり、座ったり、寝たりというシンプルな動作によって「自分がどうしたいのか」動くワークが難しかった。

これはしっかりと相手に伝わるメッセージを出すということで、日本人が苦手とする分野だ。「言葉」のレベルでやれば、これは自己主張トレーニングだと思ったが、動きを通してやると「言葉」のレベルより深いところでからだが動いてしまうので、無意識な動きの中に自分のありようが顕れてしまう。

三人というのが、関係性のドラマとしても一番葛藤が生じやすいし、二対一の関係になりやすいので、そこでの情動の力学は見ているとおもしろいのだが、当事者としてやってみるとなかなかしんどい。

最初のグループがやっているときに、「自分のやりたいことを無駄な動きをしないで伝えてみて」と指摘するトモさんの意図がよく分からなかったのだが、後で自分がやってみて納得した。曖昧な動きだと相手に伝わりにくいのだ。

私たち日本人はこの曖昧さを人間関係の潤滑油としてうまく機能させ、葛藤や責任を回避し、調和を保ってきた。「わがままに動いたほうが相手に伝わる」という言葉に頷きながら、実際の自分の動きは対人恐怖状態。私ってこんなに人が怖かったのかしらと、半分からだが硬直する。近づいてもいいかなと思っても、からだがこわばってなかなか前へ踏み出せない。近づかれると逃げ出したくなる。そこの動きでストップがかかり、「二人に逃げ出したいという気持ちが伝わるように動いてみて」という言葉に、二人の間をまっすぐに通って逃げると、今度は、自分のなかに近づきたい衝動が起きてくる。動きのなかでどんどん自分の気

持ちが変化する。自分のなかに起きた気持ちに正直に従いながら、動きを選択できるようになってくると、フッと自分が楽な場所に動けるようになってくる。

最後に、私たち3人にとって居心地のよい場所と動きが見つけられた。3人がそれぞれ背中を向けて触れる位置に座った時に感じた安堵感は、今でも印象に残っている。

このプロセス自体が自己表現の訓練のようで、「自分がこうしたい」ということをはっきり主張しても他者とつながれるし、楽で居心地のいい状態を「選択」できるということをからだのレベルで体験できた。リスクを負うことを恐れて自分の表現を抑えるのではなく、多様な回路を使って、自分の表現のしかたを「選ぶ」ことができるということをもっと学ぶ必要があるのではないかと思った。

自分の内面に深く入っていくことは楽にできるのに、他者との関係性にベクトルが向くととまどってしまうということに気づいたが、それを深刻にならずに、楽しく体験として深めていくことができればいいなと、改めて身体表現やアートを手段にした方法を再認識させられた。

（おおぬま・もとこ／アロマセラピスト）

女たちの情報紙
ふぇみん
femin
婦人民主新聞
WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

見本紙お届けします。お問い合せ下さい。

草の根は伸びつづける。

からだのしんぱい
はたらくもんだい
こころのえいよう
さべつへのいかり
アジアのうごき
あんぜんてなに？
きのうまでのみち
あしたへのみち
わたしのいけん
あなたのいけん
おんなというちから。

世の中に？をもち始めた、男たちにも。

新聞代
（送料込）
1ケ月 750円
3ケ月 2,250円
6ケ月 4,500円
1 年 9,000円

毎月・5日・15日・25日発行

創立以来、無党派の立場で50年。
女の視点で創る、もうひとつのメディア。

東京都渋谷区神宮前3-31-18-301 TEL 03(3402)3244,3238 FAX 03(3401)3453
大阪府堺 大阪市北区中崎西3-1-5 TEL 06(371)2429

ふぇみん婦人民主新聞
婦人民主クラブ責任編集

特集　女性と表現Ⅱ

★「同じ」への疑問

―フェミニズムとりんごをめぐって

堀田　碧

「郊外中流主婦」の悩み

去年の秋、ある地域の女性センターの講座で、「世界の女性たち」について話をする機会があった。昼間の講座でもあり、参加者はほとんどが近くに住む「主婦」だとわかった。

どんなふうに話そうかと考えるうち、ベティ・フリーダンの『女らしさの神話』にふれようと思った。いまから三十年以上も前の本だけれど、なんといっても、アメリカ第二波フェミニズムのきっかけともなった有名なベストセラーだし、キャッチコピー風にいえば、「郊外に住む中流の専業主婦の『名前のない悩み』をとりあげて、たちまち全米に共感の嵐をまきおこした」本である。いま、さまざまな悩みをかかえ、「自立」を求めて立ちあがっている、日本の「郊外に住む中流の専業主婦」にも共感を呼ぶかもしれない。

一九六〇年代のアメリカでは、繁栄のなかでうまれた膨大な中流層が郊外に家を持ち、ホワイトカラーの夫、専業主婦の妻、学校へ通う子どもたち、という「幸せのホームドラマ」を演じていた。そして、そうした、郊外のこぎれいな一戸建てに住み、家族に囲まれ、電化製品のおかげで家事からも解放されて、傍目には「幸せいっぱい」な主婦たちが、夫や子どもたちを送り出してから、ひそかにため息をつき、「わたしの人生はこれだけなの？」とつぶやく…

…これが、ベティ・フリーダンのえがいた「名前のない悩み」だった。フリーダンは「女らしさの神話」、つまり、「女性は妻であり、母であるべきだ」という「神話」に縛られながら、満たされない思いに悩んでいた主婦たちに向かって、そうした悩みは正当なものであり、女性は、妻や母としてだけでなく、社会的キャリアを持つことで自己実現をはかるべきだ、と説いたのだった。

この、三十年まえのアメリカの主婦の姿は、いまの日本の主婦がおかれている状況と、全体として、かなり似通っているように見える。

繁栄のなかでうまれた膨大な中流層――郊外の一戸建て――サラリーマンの夫と専業主婦の妻と高学歴の子どもたち――あふれる電化製品――「わたしの人生は……？」という問いかけ――「女らしさの神話」――。

わたしは、日本の「郊外に住む中流の主婦たち」に話しかける言葉を探して、フリーダンの本を読みはじめた。

アメリカでは「新聞、雑誌、書籍で大家たちが、女性の役割は良妻賢母になることだと唱えてきた」とか、それでも、「夫や子どもや家のほかに『私はもっと何かが欲しい』という女性の心の中の叫び声」とか――うん、このへんは共感をよぶだろう。

ところが、である。読みすすむうちに、どうもうまくないよこれは、という感じが強くなってきたのだ。「夫を玄関まで送り、行ってらっしゃいとキスし……それから、ご機嫌で汚れひとつない台所の床に電気艶だし器を走らせる」アメリカの主婦。「理想的な妻、母になろうと努め……子どもたちにはアイロンがけに手数がかかる、フリルのいっぱいついたドレスを作ってやり、パンを焼く」アメリカの主婦。「健康で美しく教養が高く……女らしさを十分に発揮し……主婦として母親として、一人前の対等のパートナーとして重んじられた」アメリカの、郊外住宅の主婦。

どうも、ちがう。

日本には、「クリーナーで床を掃除するのにアイ・シャドウまでする」主婦だとか、「夫が家事を手伝ってくれないと憤慨し、皿を洗えと命令」する主婦は、たぶんあまりいない。

これは、どうみても、日本の「郊外中流主婦」の像とはちがっている。

とたんに、わたしの頭には、アメリカで見た「郊外住宅地」の光景が浮かんできた。広い敷地、あふれる緑、芝生の庭。そこに建つ、おびただしい数の似たような家々。たまたま訪れたワシントンDCの「郊外」で、そのとき、わたしが圧倒されたのは、その場所の「豊かさ」ではなく、

その「異質さ」だった。その場所は、「中流の住む郊外」というアイデンティティを、圧倒的に自己主張していた。ああ、これが、アメリカ人が「わたしは郊外に住んでいます」と言うときの、「郊外」なのだ、と思った。

それは、駅前にスーパーと雑居ビルとファーストフードの店が建ちならび、自転車があふれ、マンションやらアパートやら小さな商店やら住宅やらが、どこからどうという区別もさだかでなく軒をつらねている、わが「郊外」とは、かけはなれている。

アメリカの「郊外」は「同じ」郊外でありながら、日本の「郊外」とはまったくちがうのである。そして、アメリカの「郊外中流主婦」とは、なによりも、ああいうアメリカの「郊外」に住む「主婦」のことなのだ。

そうだとすれば、アメリカの「郊外に住む中流の主婦」と、日本の「郊外に住む中流の主婦」とでは、ちがうのではないか——。

イギリスのりんご

これは、「りんご」だと、そのとたんに、思った。

イギリスで、よくりんごを食べた。ポケットにいれて散歩にゆき、ナップサックに放りこんでおいては大学のベンチでかじり、家で本を読みながら食べた。イギリスのりんごは、小さくて、安い。青、赤、黄と、色や種類はいろいろあるが、みんな——クッキング・アップルと呼ばれる、すっぱくて料理用に使われる大きい青りんごのほかは——小さい。ちょうど、握りこぶしくらいの大きさ。味は酸味があって、しゃりしゃりと固い。値段は、一個二十円くらいだ。

だから、このイギリスのりんごは、日本のりんごと、すごくちがう。日本のりんごは、大きくて、酸味は弱く、甘くてやわらかい。そして、値段が高い。ポケットには入らないし、本を読みながらかじるには、大きすぎる。

科学（近代科学）が、「りんご」というものを植物学上特定したとき、それによってうまれたのは、どこにあっても、どんな色や形をしていても、それは本質的に「りんご」なのだ、という考え方だった。そして、本質的に「りんご」である以上、その土地で、「りんご」と呼ばれようと、「APPLE」と呼ばれようと、どんな食べ方をされようと、「同じ」ものなのだ、とされたのである。

たしかに、それはそれで、意味をもっているにちがいない。そういうことがなければ、いろんなりんごと、さらには、いろんな梨といろんな柿のあいだで、わたしたちは、ひたすら混乱していなくてはならない。

でも、問題は、ここで「誤解」がおこることだ。

りんごの本質が特定されたからといって、現にある、それぞれの土地の、さまざまなりんごのちがいというものが消滅して、ただひとつの「りんご」ができるわけではないのに、わたしたちは「同じ」りんごを見て、「ちがい」を見なくなってしまう。りんごはりんごで「同じ」だと、思い込んでしまうのだ。

しかも、「同じ」りんごというときに、ほとんど無意識の行為として、自分がいつも見なれているりんごだけを、イメージしがちなのである。「りんご」と言いながら、とっさに、日本のりんごもあればイギリスのりんごもあれば……というふうにイメージすることは、とてもむずかしい。

たとえば、これが「柿」ならば、ようすはちがってくる。イギリスに、柿はない。だから、イギリス人に「柿」といっても、よくわからないだろうし、「柿」をひきあいにだしても、あまり意味がないことは、すぐわかる。

「梨」の場合は、どうか。イギリスにある「梨」は、いわゆる「洋梨」である。こういう洋梨を知っているイギリス人に、「梨だけれども、丸くて、実が固い」と言えば、日本の梨に近いものを想像できるだろう。つまり、「ちがい」のポイントがはっきり特定されるならば、ちがいを表現することや認識することは、よりやさしいと言える。

それにくらべると、「りんご」のちがいを表現したり、認識するのは、かなりむずかしい。イギリスのりんごと、日本のりんごは、形、色、味など、言葉で説明しようとすると、ほとんど「同じ」ようなものになってしまう。それでいて、実感から言うと、すごくちがっている。

「同じ」を、疑うこと——。「同じ」ものはいつでもどこでも「同じ」と信じることは、かぎりなくあやういことなのである。話を、もどそう。

ふたたび、「郊外」「中流」「主婦」

アメリカの「郊外」と日本の「郊外」は、言葉では同じでも、じつはぜんぜんちがうものだった。同じように、アメリカと日本の「中流」、アメリカと日本の「主婦」も、じつはぜんぜんちがっているのではないだろうか。

そもそも、「中流」とはどういう人たちか。

これは、いうまでもなく、英語でいう「Ｍｉｄｄｌｅ—ｃｌａｓｓ」の訳で、「中産階級」とも訳される。社会的階層を、上流階級（資本家階級ともいう）、下層階級（労働者階級ともいう）に分け、その中間が「ミドル・クラス」だ。

階級についての論議の長い伝統をもっているイギリスで

見た、「ミドル・クラス」は、職種や経済力だけでなく文化の面でも、かなりくっきりときわだったひとつの集団を形成していた。それは、伝統的に「上層中流（アッパー・ミドル）、中層中流（ミドル・ミドル）、下層中流（ローワー・ミドル）」などと細分化されてきたのだが、同時に、このかんの社会的変動のなかで、あらたな論議の的となっている。いずれにせよ、イギリスでは、いまでもやはり、「階級」はキー・ワードであるように見える。

一方、アメリカという国は、その形成や歴史的経過から、「総中流幻想」とか「アメリカは階級のない国」などと言われたほど、「階級コンシャス」の弱い社会だった。それでも、人種や性にかかわる差別が鋭角的につきだされるなかで、それとも連動して、アメリカにおける「社会階級」とはなんなのかが分析され、「中流」とはどういう人たちなのかが問われている。最近読んだ本のなかで、あるアメリカの社会学者は、「ミドル・クラス」を定義して、「『専門職的ミドル・クラス』や『専門職と管理職クラス』のことを指す」といい、「この定義によると、ミドル・クラスはアメリカの人口の二割に満たない」と言っていた。

日本ではどうか。日本では、学問的にも歴史的にも、すごく偏った形で「階級」という言葉が使われた結果、ベルリンの壁の崩壊と時を同じくして、それは「死語」となり、かわって、「一億総中流」という言葉が、すべてをおおいつくした。それは、高度成長をへた日本社会における、膨大な中流層の形成や、結果として「貧富の差」の幅が相対的にせまい社会のありようを、反映した言葉だったにはちがいないが、あたかも「サラリーマン」という言葉が、「労働者」や「被雇用者」をなくし、「ブルーカラー」と「ホワイトカラー」の壁をとりはらって、ついには「管理職」や「経営者」までものみこんでしまったように、「中流」ないしは「中流意識」は、現実には存在している区別や差別を、見えないものにしている。いったい、日本の「中流」とはなんなのか、そして、だれなのか——考えてみると、きわめてあいまいである。

アメリカの「中流」にしろ、日本の「中流」にしろ、それをきちんと定義づけることはむずかしい。ただ、言えることは、日本の「高度に発展した資本主義社会」が、イギリスのそれとも、アメリカのそれとも、かなり大きくちがっているように、その「中流」も、イギリスの、さらにはアメリカの、「ミドル・クラス」とは、大きくちがっていると考えるべきではないか、ということだ。いま、わたしが住む「郊外」で、わたしのまわりにいる「中流」の人々と、

ベティ・フリーダンが属していたとする「中流」の人々とが「同じ」とは、わたしにはとうてい思えない。

「主婦」も、そうだ。

日本では「主婦」をめぐる論争がくり返されてきたのだが、『主婦論争を読む』（上野千鶴子編）をみても、「主婦とはなにか」という明確な定義はなされていない。それほどまでに、「主婦」とは「自明のことがら」だったのだ。しかし、「論争」がつきだしたのは、むしろ、「主婦」という名で呼ばれるもののあいまいさだ。それは「地位」（法的？慣習的？）なのか、「職業」なのか、それともひとつの「アイデンティティ」なのだろうか。

それを定義するには、まず、その前提となる、家族、家庭、異性愛、夫婦、親子といったありよう（制度とイデオロギー）を解明しなくてはならないだろうが、それらは、それぞれの場所で、特定の歴史的背景をもち、特定の経済的、社会的、文化的な状況のなかにある。そうした、特定のコンテクストのなかにおかれている、アメリカの主婦と日本の主婦は、けっして同じには語れない。

「フェミニズム」のあやうさ

結局、わたしは、日本の「郊外に住む中流の主婦」たちに向かって、フリーダンやアメリカの第二波フェミニズムの話をしたあとで、「そんな『名前のない悩み』なんて、暇と金のある女性だけが言えるぜいたくだ」という、黒人や貧しい女性たちからの批判を紹介した。「悩むまえに、働くしかなかった」女性たちの声を伝えたとき、講座に出席していたかなりの数の女性たちが、うなずいたように見えた。あとで、昼食を食べながら話をしたが、ある四十代の女性は、「まわりはほとんどパートに出ていて、こういう講座にはこられない」と言い、六十代の女性は、「最近、在宅介護で母親を看取ったばかり」と言った。

アメリカの黒人フェミニスト、ベル・フックスは、「アメリカのフェミニズムは、性差別の抑圧で最も犠牲になっている女性たちから立ち現れてきたことがない」と書いて（『黒人フェミニストの主張』勁草書房）アメリカの主流派フェミニズムを批判したが、そのアメリカの、あるいは欧米の主流派フェミニズムを、日本の女性たちにあてはめようと躍起になっているような傾向が、日本のフェミニズムにあるように見える。たとえば、地域の女性たちの勉強会などに講師としてよばれて、「女性の自立」の名のもとに、「妻、母というだけではなく、社会的キャリアをもつことで自己実現をはかるべき」と、まるでフリーダンさながらの

せりふをくり返すフェミニストがいる。

でも、それは、いつでも「正しい」のだろうか？

「女性の自立」の具体的なイメージは、いつでも、どこでも、だれにとっても、「同じ」ものであるべきなのか？

ある特定の歴史的時点では有効なことが、他のコンテクストのなかでは、無効であったり、ときには、まったく反対の効果を生むこともあるのではないか？

いま、日本の社会では、一方で依然として根強い性差別があり、他方では女性労働力の拡大が階層化をともなってすすんでいる現実がある。そうしたなかで、あらゆる日本の女性たち、少数の、専門職について高収入を得る可能性のある女性たちばかりでなく、大多数の、これまで働きつづけ、また、働くことが低賃金職につくことを意味している女性たちをふくめて、「家の外に出て働くことで自己実現を」と言うフェミニストたちは、再びフックスの言葉を借りるなら、「メイドやベビーシッターや工員や事務員になることが、はたして有閑階級の主婦であることに比べて、より満足できるものなのかどうか……語らない」のである。

こうして、日本の「欧米モデルにもとづく近代主義」を最上と信じるフェミニストたちは、「フェミニズム」を、おおかたの日本の女性たちにとって、冷たい、魅力のない、そしてお高くとまった教条にしてしまっているのではないだろうか。

誤解のないように言っておきたいのだけれども、ある特定の女性集団に対する性差別について問題にすることは、べつに悪いことではないし、比較的めぐまれた状況にある女性たちがそれだけで倫理的に非難されるべきであるかのように思ったり、彼女たちの悩みを嘲笑したりすることは、まちがっている。問題は、アメリカでも一部のめぐまれた女性（白人、ミドルクラス）にだけ有効なことが、日本の地で、しかも、すべての女性たちに有効であるかのように、語られることなのである。

「同じ」でないものに、「フェミニズム」の名のもとに、「同じこと」があてはめられるあやうさ――イギリスのりんごをイメージして、日本のりんごをむりやりポケットにつめこんだら、ポケットは破れてしまうのに……。

（ほった・みどり／英国ケント大学 女性学 修士課程終了。現在、文筆・翻訳業）

＊ご意見ご感想などありましたらE-mailで。

E-mail m-hotta@xa2.so-net.or.jp

特集　女性と表現Ⅱ

★Colors of English とわたし

朴　和美
（パク・ファミ）

はじめに

一九九六年九月、わたしは長きにわたる英語への思い入れを、自主英語クラス「Colors of English／カラーズ・オブ・イングリッシュ」という形で結実させることになった。理想だけが肥大化した、なんとも形の定まらぬわたしの思いに辛抱強く耳を傾け、協力を申し出てくれたのがフェミックスだった。こうして、フェミックスが主催し、わたしがコーディネートするという形のフェミニスト英語中級講座「カラーズ・オブ・イングリッシュ」が誕生することになったのだ。

全12回のクラス（毎週金曜日の夜）を一つの学期とした英語講座も、すでに四学期を終了し、今年二月から第五学期目が始まる。これまでの四つの学期を通して、延べ四〇人近い女性たちがクラスに参加してくれた。

わたしたちの初期の期待をはるかに超えて、クラスはそこに集う女たちをエンパワー（元気に）してしまう、とてもユニーク（個性的で希有）な場になっている。確かに、アイデアの萌芽を育て始めたのはフェミックスとわたしだが、その小さな芽はわたしたちの思惑とはかかわりなく、スクスクと好き勝手な方向にその芽を伸ばし始めている。わたしは今、わたしの意識の深いところにその誕生の起源をもつ、このクラスの成長ぶりを不思議な感動をもって見守っている。

これからも「カラーズ・オブ・イングリッシュ」には、

参加者の持ち込むさまざまな色彩を、ときには全員でその色合いの違いを楽しんだり、あるいは色の混淆の妙味をあじわいながらも、一人ひとりが独自のワーク（作品）を創り上げてゆけるそんな場であり続けて欲しい。だがわたしはこの時点で、一度自分の位置を確認しておきたいと思う。一体どんな軌跡を経て、わたしが「カラーズ・オブ・イングリッシュ」にたどり着いたのかを、一度きちんと言語化しておきたいのだ。そこでこの場を借りて、わたしと英語との長い歴史を、時系列に沿って書き綴ってみたいと思う。

わたしと英語との長い歴史

当然ながら、わたしと英語との四半世紀以上に及ぶ関わりを語ろうとするとき、わたし自身の出自を含めた「個人史」に触れないわけにはゆかない。「パーソナル・イズ・ポリティカル」、まさに個人的なことがらの中にこそ、わたしたちの抱える問題の政治性が凝縮されているのだから。

言語の持つ政治性

「在日」コリアン*1（以下「在日」と略す）として生まれ、団塊の世代の尻尾部分に属するわたしは、義務教育を日本の小・中学校で受け、高等学校の三年間を大韓民国系の東京韓国学園という民族学校で過ごした。話を英語に沿って進めると、ほとんどの日本人と同じように、わたしも中学生になってから This is a pen. and that is a book. に象徴される「英語教育」なるものに初めて触れたことになる。そして、これまた多くの日本人とおなじように、この初めての「外国語」にとまどいと興奮の両方の気持ちを抱いたものだ。ただひとつ他の日本人と違っていたのは、生まれ落ちてから使い続け、なおかつそれほど支障なく使いこなせる唯一の言語である「日本語」も、実は在日であるわたしにとっては「外国語」だということだ。

ほとんどの日本人は、日本語が話せて当り前、そして日本語以外の言語が話せなくて当然と、余程のことがない限り思考がそれ以上に拡がることはない。ところが、わたしたち在日にとっては、何語で話すのかという問題には、たえず歴史性と政治性がつきまとっている。二世・三世が主流になって久しい在日社会では、韓国語あるいは朝鮮語を流暢に話せる人の数が減少しつつある。だがたとえ、朝鮮半島の言語をしゃべれなくとも、幻想としての「母国語」のイメージは、さまざまな形でわたしたちに影響を与え続けている。こうして在日の生まれ育った環境が、言語というものの政治性を、否応なくわたしたちの目の前に突きつけてくるのだ。

わたしは義務教育を文部省管轄下の日本人学校で終え、その後韓国学園に入り、そこで「言語」に関する個人的な選択をかなり意識的にすることになった。朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）系の民族学校とは異なり、韓国学園は全ての授業を韓国語で行っているわけではなかった[*2]。ほとんど毎日「（韓）国語」のクラスがあったが、他の科目は韓国人あるいは日本人の教師によって日本語で進められていたのだ。いずれにせよ、わたしはそこで、英語以外に初めて「母国語」なるものを学び始めることになった。

一九六〇年代そして七〇年代の日本社会における朝鮮人差別の状態は現在の比ではなく、制度的差別はいわずもがな、露骨な差別が至る所に見うけられる時代であった。当然、就職差別も例外ではなく、在日が日本の一般企業に職を得ることはほとんど不可能であった。わたしを含めた在日女性の多くは、こうした生存権を脅かしかねない日本社会の民族差別に加えて、さらに在日社会（具体的には親類縁者）内の儒教思想に根ざした性差別[*3]とも格闘しなければならないという、綱渡り的状況を生きていた。この二重の抑圧の中で、朝鮮半島に根強い母性神話を内面化したオモニ（韓国語で「母」の意）は、わたしにとって文字通りのオモニ（重荷）であった。

経済的自立へのパスポート？

何重にも張り巡らされた差別という壁の中で、必死になって六人もの子どもを育て上げた母親の苦労は痛いほど分かるし感謝もしていた。ところが、胎児と母親をつなぐ臍の緒がいまだに存在すると信じこみ、「母」役割に安住し、子どもの上に君臨しようとする、母という存在に対するアンヴィバレント（両面価値的）な思いを持て余してもいたのだ。母のようには生きたくない！では、母のように生きないためには一体どうすればいいのか？この問いこそが、当時のわたしにとって、最優先に取り組まねばならない課題であった。そうした若き悩みの末に導き出された回答の一つが、経済的自立を果たすことであった。

すでに周りの状況から、日本企業への門戸が在日には閉ざされていることを知っていたわたしは、経済的自立という目標への第一歩を、高校卒業後に外資系企業に就職することに定めた。外資系企業で働くにはコトバ、つまり英語力が必要不可欠であった。このとき、わたしは自分の持てる資源（時間とエネルギー）を「母国語」である韓国語にではなく、経済的自立へのパスポートになりえると信じた英語の習得に、意識的により多く使うことを自らに課した。つまり、ここでわたしは意識的に、韓国語ではなく英語を選択したのだ。当時は意識していなかったが、アメリカの

物質的「豊かさ」の象徴である英語（厳密には米語）というコトバが、二重の差別の中で閉塞状態にあったわたしに、現実逃避を可能にするファンタジーの世界を与えてもいたようだ。

コトバの持つ「序列」

もう一つ無意識の内にわたしが受け入れていた前提がある。それはコトバにまとわりついている社会的・政治的・経済的な「序列」の存在だ。実社会の経験がほとんどなかったわたしだったが、韓国語よりも英語を取得した方が、労働市場では確実に有利であることを確信していたのだ。今でこそ、英語の通訳も韓国語の通訳も同じレート（時給あるいは日給）だが、当時は韓国語を流暢に使いこなせても、ほとんど就職には役立たなかったのだ。そうした状況下で、在日の女であるわたしが職を得るためには、なんらかの付加価値を自分に付けることが、どうしても必要だったのだ。

というわけで、かなりハッキリとした目的意識をもっていたので、勉強もしやすかった。韓国語の勉強は、落第しない程度の必要最低限度にとどめ、経済的自立を目指してひたすら英語の勉強をした。友人から「アメリカかぶれ」と揶揄されても、わたしの勉学意欲は変わることはなかった。高校を卒業してからも、英語の勉強だけは続けた。英会話学校にも幾つか通った。NHKのラジオ英語講座も眠い目をこすりながら真面目にやった。近くの（キリスト教）教会のバイブル講座にも出席した。「生きた」英語を学ぶためにアメリカ人家庭に住み込み、メリー・ポピンズを気取ってナニー（家庭教師兼子守）をしたこともある。ありとあらゆる機会を利用して、英語力を高める努力をしたのだ。

残念ながら（現在も状況はあまり変わっていないかもしれないが）当時の多くの在日の親たちは、女の子どもには高等教育は必要ないと考えていた。また実際問題として、女子を大学まで行かせる経済的な余裕のある家庭は非常に少なかった。限られた家族の資産は、男子とくに長子に優先的に使われるのが常だった。わたしの育った家庭も例外ではなかった。女子に高等教育を奨めるような雰囲気の全く無い環境の中で、わたしは育ったのだ。日本人学校でもそこそこの成績をとり、韓国学園では常にトップクラスの成績だったが、わたしの頭の中には大学に行ってさらに勉学を続けようという発想は、当然のごとくなかった。それよりもなによりも、高校を卒業して一日も早く自分の稼いだお金で食べてゆけるようになりたかった。自分の力で生きてゆけるようになりたかったのだ。

そうした堅い決意を胸に秘め、それなりの英語力がつい

た頃から就職活動を始め、念願の外資系企業への就職を現実のものとすることが出来た。一九七〇年代当時は、女性にとって外資系企業はニッチ（隙間）マーケットだった。まだ高学歴あるいは留学経験のある女性の数がそれほど多くはなく、ある程度の英語力でもそれなりの条件の仕事が見つかる時代だった。だが、在日社会の中で女として育ったわたしには、家庭以外の場で活躍する女性のロールモデル（手本となる存在）がなかった。必然的にわたしの野心は、自分以外の人間に依存せずにどうにか一人で食べてゆける経済力を手にするという次元を超えて拡がってゆくことはなかったのだ。

小さな枠の中で見ていた「差別」

差し当たってのわたしの具体的な目標は、バイリンガル・セクレタリー（英語と日本語を使いこなせる秘書）になることであった。こぎれいなオフィスで、ファッショナブルなスーツでピシッときめ、「白人」のボスを相手に英語で仕事を機敏にこなす……今のわたしの意識からは到底許せないバナナ的発想（肌は黄色でも意識構造は似非白人）を、当時のわたしはしていたのだ。目に見える民族差別と性差別に対しては敏感に反応し、それなりの反抗を試みたわたしだったが、実はとても小さな枠の中でしか「差別」が見えていなかったようだ。

欧米白人文化崇拝の傾向は、日本の企業文化の中に今でも色濃く残っている。そうした脱亜入欧的意識の一掃されていない企業社会の中で、わたしは白人男性をボス（上司）とすることで、在日差別を表面的にかわすことができた。だがわたしの視座は、近代の植民地主義・帝国主義がもたらした世界的規模の差別の構造にまでは及んでいなかった。当時は在日という被差別者としての自らのアイデンティティの問題を、サバイバル（生き延びるため）の次元を超えて考える余裕がわたしにはなかったのだ。

わたしは高校卒業後、カナダ資本の会社を皮切りに幾つもの外資系企業に籍を置いた。職場を変えるたびに、サラリーを含めた雇用条件が良くなっていった。新しい仕事と新しい人間関係に触れるたびに、新たな自信が自分の内に生まれゆくのが実感でき心地よかった。だが当時のわたしの志は、先にも述べたように経済的な独り立ちを超えた拡がりをもっていなかったので、あっという間に差し当たっての目標は達成してしまった。

とはいうものの、全てが順風満帆だったわけではない。わたしの知る在日の家庭では、家族成員が「家庭の事情」のために会社を辞めたり、個人的な計画を断念することが当たり前に行われていた。この日本という差別社会にあっ

て「家族」こそが、生き延びるための防波堤であると小さな頃から教え込まれ、家族のために個人の自由が制限されても致し方ないとされていた。わたしの場合もしかりで、親戚の誰々が倒産したから、あるいは叔母の焼き肉屋に人手が必要だから「お前が手伝いにゆけ！」と、いつ何時命令が下されるか分からない状態だったのだ。実際わたしも、「家庭の事情」でやむなく仕事を辞めたことが何度かある。

フェミニズムとの出会い

今考えても不思議なのは、わたしに対して行われた不条理を不条理とも思わずに、当然のこととして受け入れていたという事実だ。人間というのは、一度学習してしまうと、たとえそれが不条理なことであっても、なかなかそのことを客観視できないものらしい。

このわたしに、こうした不条理を自明視せずに異議申し立てしてゆくことを教えてくれたのがフェミニズムとの出会いだった。当然その頃は、フェミニズムなどという言葉を知っていたわけではなかったが、「女の状況」といったものがほかの問題とは違って、はっきりとした立体感をもってわたしの前に立ち現れてきたのだ。だが、わたしがフェミニズムという言葉を咀嚼し、また自分の状況を言語化できるようになったのは、一九八〇年代に入ってからのことだった。いずれにせよ、こうして二十代のわたしは外資系企業と「家庭の事情」の間を振り子のように揺れ動いて過ごしたのだ。二十代のわたしについて語るとき、二度にわたって決行した日本国脱出の経験をはずすわけにはいかない。

次回は、日本脱出を果たし、英語圏の国々で暮らした日々の経験を中心に話を進めたい。

＊1「在日コリアン」という名称を、韓国籍・朝鮮籍・日本籍に関わりなく、朝鮮半島出身の家族をもつと自らを認識する者の総称として使っている。

＊2　日本に存在する国際学校のほとんどが、日本語以外の言語（例えば、英語・フランス語・ドイツ語・中国語など）を第一言語として使用しているので、韓国学園が特殊なケースのようだ。ゆえに、わたしのように韓国学園を卒業しても韓国語がほとんどしゃべれないということもありえる。

＊3　もちろん、性差別は在日社会に特有の問題ではなく、日本社会の至るところに存在している。在日女性は、（日本と在日）両方の社会の性差別から挟みうちにあったようなかっこうになっている。

パク・ファミ／ニューヨーク州立大学オルバニー校社会学科卒業。現在、日本の企業で翻訳業務に携わる。共著に『朝鮮人女性が見た「慰安婦問題」』（三一書房）、共訳に『性の女性史』（現代書館）等。

ナヌムの家 Ⅱ

監督・ビョン・ヨンジュ
1997年・カラー・35mm・
ドキュメンタリー・71分

戦時中、従軍慰安婦にされていた女性たちを撮ったドキュメンタリー映画「ナヌムの家」（95年）は、韓国国内はもとより日本・オーストラリア・ヨーロッパなどでも紹介され大きな反響がありました。その後、ソウル市内から車で2時間ほどの田園地帯に移転した〈ナヌムの家〉で暮らすハルモニたちから、「また映画を撮らないか」という誘いを受けて、ビョン・ヨンジュ監督とスタッフたちが、再び〈ナヌムの家〉に通って完成させた、続編「ナヌムの家Ⅱ」が、まもなく東京を皮切りに各地で公開されます。

映画の内容に関しては「民権協ニュース／97年12月号」に掲載されたカン・ヘジョンさんの文章がすばらしかったので、ご本人の了承を得て、転載させていただきます。（編集部）

＊　＊

映画「ナヌムの家Ⅱ」

カン・ヘジョン

人間へのまなざし

元日本軍「慰安婦」女性の語りに耳を傾ける、または彼女たちの日常を描いた映画を見るといった時、人々はどんな物語を期待してそれらに向き合うのだろうか。辛かった過去の体験、歴史の生き証人としての当事者が今何を望んでいるのか。私たちが一番聞きたかったのは、そういったところだろうか。そして、被害当事者の存在を受け止めたいとの思いから、証言台の上に彼女たちを立たせてきたのは、もう何度になるのだろう。

だが、私たちが必死になって彼女たちの存在に向き合ったつもりのその場で、私たちは「問題」への理解と共感とはちがった、「人間」への眼差しとふれあいというものをあわせ持ち得ていたのか。そんな問いが、恥ずかしくも心の中にわき起こってくる映画に出会った。

韓国のビョン・ヨンジュ監督によるドキュメンタリー「ナヌムの家Ⅱ」である。九五年に完成し、日本でも大きな反響を呼んだ「ナヌムの家」の続編であるこの作品は、前作の完成後、「次の映画を撮ろう」というハルモニたちの誘いに応える形で制作された。そういった経過を耳にするまでもなく、「人間としての私たちを、丸ごと見て欲しい」というハルモニたちの強烈な自己アピールがカットごとに滲み出ており、泣いたり笑ったりしている

うち、上映七十一分があっという間に過ぎてしまう。

五〇年もの間、自らの一生を恥じてきた女性たちが、最期をいつ迎えてもおかしくない年齢で語りを始めた。そして、自己表現の喜びを知った。そんな時、人間はこれほどまでに輝かしい存在になり得るのかと、とことん感じさせてくれる映画なのだ。

この人たちは、集会の証言やマスコミ報道を通して私たちが接してきたハルモニたちと同じ人物なのかと思わせるような、お茶目な表情がそこにはある。働き者のハルモニもいれば、食べている時こそ極楽だというハルモニ。家の運営をめぐって会議もすれば、些細なことでケンカもする。「体が臭うと男が逃げる」と大声を出す人や、男とのケンカの仕方をコーチする人もいる。また、お酒が入れば陽気に歌うが、友の死を前に自らの生も死と隣り合わせであることに恐怖する。

深い信頼を得た者の前でこそさらけ出せる、ありのままの喜怒哀楽を、カメラは確実にとらえていた。だが映画は、こんな様々な横顔から溢れんばかりの魅力を感じさせる彼女たちの体と心に、あの間違った時代に、そして今もなお、同じ痛みが走っていることを忘れさせない。映像の中のハルモニたちが見せる涙と笑いに捕らわれながらも、一人一人の個性が豊かであるが故に、彼女たちが背負っている共通の「痛み」のことが頭を離れないとは、なんと腹立たしい逆説なのだろう。

ハルモニたちは創造的な意志で自らの生を転換し、春の大地に新たな種をまいていた。

持ちうる感性を全開にした多くの人が、このすがすがしい「癒しの物語」の前に立ち、ハルモニたちの魅力にたっぷりと身を任せて欲しいと願う。そうした後の余韻が深ければ深いほど、性暴力の実態を告げるラストの字幕は、ハルモニたちの存在と同じ重さを持って、この時代の現実を私たちに厳しく問いかけてくるであろう。■

＊　＊

●公開予定

東京／BOX東中野(☎03-5389-6780／JR東中野駅西口北側正面ポレポレ坐ビル地階)にて98年2月14日より

高崎／高崎映画祭(☎0273-26-2206)にて98年4月2日

福岡／夢天神ホール(問合せ☎092-733-0949)にて98年3月14日、15日

大阪／シネ・ヌーヴォ(☎06-582-1416)にて98年4月中旬

名古屋／シネマスコーレ(☎052-452-6036)にて98年2月28日より

札幌／シアターKINO　初夏

他にて全国公開予定

フェンスを超えて

小平陽一

毎年正月は帰郷して実家で過ごすことにしている。独り暮らしをしている母親が、僕の帰りを心待ちにしていてくれるからだ。これっぽっちで申し訳ないのだけど、これでも一年分の親孝行のつもりなんだ。

それでいつも暮れに、東京の築地までリュックを背負って、お正月用の食材買い出しに出かける。それをお土産に持ちかえるんだ。母はこれをとても楽しみにしていてくれるから、いつしか欠かせない年中行事になってしまった。

今年は、母がたちの悪い風邪を引いてダウンしてるという。だからおせちが作れないとボヤいていた。じゃー、まかせろと言って、いつもより余分に食材を買い込んで、もちろん包丁と砥石も抱えて帰った。

実家では、暮れの大掃除をし、年越しそばを作り、持ち帰った食材をおせちに仕立ててお重に詰めた。これで母と新年を迎えた。妹弟の家族も集まって賑やかになり、母はとても喜んでくれた。そして僕は母にありがたがられた。

しみじみ母がつぶやいた。「お前が家庭科の先生やってて本当によかったわ」と。「違うってば、家庭科は料理裁縫じゃないっつうのに」って心でつぶやいたけど、ぐっと飲み込んで照れ笑いでごまかした。

三年程前、僕が家庭科に転科した時を思い出した。母は、「お前が家庭科の先生になるなんて、思っても見なかったわ！」と、嘆きとも、あきらめともつかないつぶやきを僕に漏らしたことがあった。

なんだか、許されなかった結婚をやっと認めてもらったような、不思議な気分だった。

このことを友達に話したら、「そりゃー、あんたが男だからよ。女だったら、ありがたいなんて思っちゃくれないんだから。やるのが当然で、やらなきゃー非難されるだけなんだからね」と言われた。それもそうだ、そんなもんかもしれないなー。僕は男で、うまい汁だけを吸っているのかもしれない。

（こだいら・よういち）

私の家庭科

ラフスケッチ

立山ちづ子

共食は、共育、そして共生を促す

十二月号の「家庭科屋台村通信」では私の稚拙な発表要旨を記載していただき、ありがとうございます。ぜひ本誌にという依頼があり、あの実践の歩みと現在について、まとめてみました。跡をたどっていくと、そのときどきの時代の要求や家庭科の課題にどう取り組むか、試行錯誤してきたことが見えてきます。初めから仮説があって取り組みをしたわけではありません。これを叩き台として、共生の営みの具体的な展開をさらに多様にしていけたらうれしいことです。ご意見をお願いします。

高齢者が食物実習の授業に参加する

「高齢社会に向けて」の授業展開の中程に、高齢者向け食事の実習を計画した。九一年十一月、以前「Ｗｅ」に仲間と報告させていただいた北欧の福祉施設などの視察をした翌年である。高校の位置する甲佐町の有志で構成された健康クラブの一七名（男五、女十二）の皆さんは、一人暮らしか高齢者のみの世帯で、自分の生活は自分で処理している人たちである。調理の手際のよさ、後片付けへの気配り、物を大切に扱う心、男性・女性といわず、それぞれが技と知恵を働かせている。会食後、五人の方から、積極的に生

活を楽しみ、健康を維持する努力や工夫をしておられる話を聴いた。

日頃はむっつりしてほとんど会話しなかった生徒が、身近な叔父や伯母、祖父母の名前が高齢者の話に出てくると、その近況を話し始めていく。実習中の話題はこの数十年間の、この地域に暮らしてきた人々に一挙に広がっていった。他方で、一九一〇年代、この学校が女学校であった頃に学んだという守田さんの「卒業後初めてここの門をくぐりました」という言葉に、私は学校が地域に門を閉ざしてきたことに気づかされた。

初めての土地での家庭科の展開を探る

翌年四月に転居を伴う転勤をした。六八歳になる母を一人暮らしにするのは心苦しかったが、海のそばで暮らしてみたいという自分の願いを優先させて、娘（小学三年）との二人暮らしを始めた。初めての土地で私は年齢上、学科主任となった。若い職員が多い学校で、私は教育活動の責任の重さをより強く感じるようになった。担任はできないので生徒の家庭訪問が公的にはない。生徒の本音の生活状況がつかみにくかった。自分の授業が地域の生活実態から浮いてしまう懸念をもった。土・日曜は九〇km離れた母の家に帰らなければならないので、月～金曜にできるだけ地域の生活の様子を知りたいと、店や市場や海岸や保護者会などで話を聞き集めた。

その年度の秋に、かつて産婆さんをしていた永野やえのさん（八〇歳余）の話を聴く機会ができ、一人住まいの自宅を若い先生たち四人と訪ねた。そこで、この地域の戦前・戦後の様子だけでなく、朝鮮との関係までを含む人々の動き、出産事情を聞き知ることになった。永野さんに授業でのお話を依頼した。当時、天草農業高校は今の改編前で生活科四クラスがあり、生徒一六〇名を二組に分けて、「保育」科目で昔の出産・避妊・男女の関係について、生徒はとても興味深く聴き入った。そして、父母や祖父母から、人の生命の誕生に関わる歩みを身近で伝えてもらっていないことがわかってきた。私たちの生活で何を大切に生きるのか、この社会でその根底がゆらいでいるのではないかと考えるようになった。

老人クラブの協力を得る

翌年、地元の本渡市老人クラブ事務局を訪ね、高校生に

昔の生活の様子を話していただくようお願いした。そこの方はこの高校の戦前の卒業生であり、また戦後に自分の子どもたちも学んだものの、その後は全く縁がなくなっているという。高齢者の方々は私の申し入れを快諾され、さっそく授業への導入を計画した。同僚の若い先生たち五人のなかの一人、地元出身の中野祥子さんは、人的・物的に情報が多いので、まず手始めに学校の位置する地元老人会との合同調理会を計画した。事前に世話人の方と日程やメニューなどを話し合いながら詰めていった。当日、授業が空いている職員は参加して、その後の自分が中心になる授業計画の参考にした。

二回目は私の担当で、老人クラブの理事と女性部の役員の合同の参加となり、実質的に本渡市老人クラブと高校生の合同調理会の行事としての始まりとなった。対象が進学希望者の多い普通科のクラスで、時間的な制約があり、料理は簡単な炊き込み飯、みそ汁、梅かんとし、会食で高齢者の昔話を聴くことを重視した。事前に、食糧事情の移り変わり、昔の男と女の関係、昔の親と子、戦中・戦後の話にテーマを決めてお願いした。代表の四人がそれぞれ記憶をたどり、他の方の助言をいれて整理し、生徒の前ではメモを見ながら熱弁をされた。一人五分の予定は一五分にも延びて、大幅に時間延長となった。

その後、高齢者の方々に学校内を見学してもらったが、戦前は農業学科のみだったと、自分が学んだ頃の施設や場所の様子を話す方もいた。私は案内しながら、この学校の歴史、この地域で学校がはたしてきた役割などがどんどんわかってきた。老人クラブの方が地域の生きた博物館のように思えてきて、子どもたちの学びの場にもっと参加してもらうべきではないかと考えるようになった。

赴任して二年目、熊本県教育委員会が募集した「活力ある高校づくり推進事業」一〇校の対象となり、助成金五〇万円を得た。主にこの調理会の高齢者の材料代、お礼用のお花代などに費やした。二〇回のうち、一四回を九月～十二月の二学期に集中する計画となり、同僚の若い先生たちにとって初めての地域の人々の参加の授業展開は戸惑いもあり、時間的にも精神的にもずいぶん負担になってしまった。が、お互いの授業計画を事前に知らせ、当日は支援しあい、あとの反省会も率直に意見を出し合うという授業をチームとして展開できたことは、相互の教育活動の連携が確かめられ、私は信頼関係が深まったように感じた。

具体的な活動は、調理会（季節の日常食、秋の産物を使った郷土食、伝統食、海の産物の魚や海草料理）、聞き書き（産

婆さん・高齢者)、特別・養護両老人ホームや障害者施設での介護実習などであった。

九四年度は本渡市の福祉基金制度が福祉対象者に始まり、老人クラブ女性部が主体者となり、生き甲斐活動を高校生との交流で取り組むという計画で、女性部長さんが申請した。活動経費のうち、主に高齢者の材料代を賄うことに当てられた。学校の福祉教育が福祉行政の一つを具体化することに参加したことになるといえよう。

「家庭看護・福祉」を担当する

これまでは「家庭一般」を中心とし、農業、商業、普通、そして生活の各学科で一年に一回ずつは交流と介護の実習ができるようにしていた。この年から新設された「家庭看護・福祉」二単位を学科改編した生活情報科の二年次に、翌年三年次にと、二年間担当した。文部省も手が回らず、教科書がない。これまでの積み重ねをさらに広げていくことにした。

専門性を身につけるには、その先達者に直接学ぶことが確実であり、早道である。九三年一〇月に天草郡市看護協会の研究発表大会に参加し、病院、保健所、社会福祉協議会、自治体福祉課などの、取り組みの現状や課題を把握することができた。そして、その代表が学校の近くの総合病院総婦長の田尻典子さんで、高校生の授業としての看護実習を病院でしたいとの私の希望を快諾していただいた。二月から翌年度にかけて三回の実習を重ねることにした。

また、自転車で一五分ぐらいの知的障害者の授産施設と子どもの養護施設を訪問した。年齢は大人である重い障害の方への対応に生徒は戸惑ったが、二回目は障害が軽度の方たちと畑での芋掘りの仕事を一緒にしてその手際よさに驚き、芋料理をともに食べて友達になった。

私は高齢者の痴呆問題を深めたいと思っていた。老人ホームで痴呆が進む人たちにどう対応していくのか、私自身伯母(七九歳)に対してもわからないまま接してきた。その頃、保健所主催で、在宅の精神障害者の地域での生活を促進するボランティア活動の養成講座があったので申し込み、精神科医師の講話、精神病院の訪問、在宅の障害者の方々との交流会、共同作業などに参加した。その後、このときの藤本医師に高校生対象に講話を依頼し、その病院の痴呆棟の看護婦の協力も得られた。

この学びの過程で、人の精神の活動や病気についての無知を気づかされると同時に、高校生がこの分野について関

心が深いことがわかった。そこで講座で知り合ったボランティアや共同作業所の職員の人たちと話し合い、授産施設に通う人たちとの調理会を企画した。事前の調査に、生徒は「精神病者は、何をするか予測できないのでこわい」といった思いを率直に書いてきている。講座に参加する前の私も同じであった。ただ、母親がこの病院の看護婦さんというMさんは、このような差別を小さいときから自分のこととして感じてきたのであろう、患者さんたちがとても純粋であることを強調していた。私たちの差別・偏見の解消のためにも、ぜひ成功させたい調理会であった。

高齢者とは一年次から五回ほど合同でやってきていたので、生徒だけでの調理会と異なる喜びを味わっていた。ただ今回は生徒の方が先生の役割を各班で果たさなければなかった。生徒には偏見の克服と責任がかかってきた。調理会は、始め緊張感が漂っていた。作業が進むうちに、班によっては明るい声が飛び交うようになり、会食ではもう友達感覚の会話に変わっていた。

「話し合いは少しぎくしゃくしていたかもしれない」が、「作る前にあった不安や心配は全然なかった」「私たちとかわらないなーと思いました。結構楽しく普通にできたのでよかったと思います」という感想から、一緒に作り、ともに食べる営みは、心を開かせ、人と人を対等な関係でつなぐということに改めて気づかされた。

学校を取り巻く地域の人々とつながる

四年後、熊本市内の定時制高校に転勤し、これまでの社会福祉施設との交流学習が、時間的に導入できなくなった。夜は一日の活動を終わって休む時間なのである。

九六年度は、高齢者で昔の遊びを伝承するボランタリーの黒川聖さんに凧づくりを教えていただくことだけに終わった。九七年度は、夜でも動ける人を探した。学校を取り巻く地元の社会福祉協議会の会長さんを訪ねて、これまでの交流活動で子どもたちが大きく育っていったことを紹介し、地域の人々の生徒との交流活動への協力をお願いした。会長の林田さんは地域の子ども育成活動が小学校相手になかなか進まないことが課題であったとして、話はすぐに具体策に入った。

二学期になって、九月は季節の産物のサツマイモと大豆、小麦粉を使ったこの地域の昔のおやつづくりである。家庭科を履修する全7クラスでやりたいので、地域の人たちに計画表を事前に渡し、参加者の割り振りをしていただいた。

この出水南社会福祉協議会は住宅地で、人口一万二千人（わが在住の甲佐町と同じ）、人材が豊富である。一回目に参加したクラスに次回も来ていただくようにお願いした。もちろん変更自由である。二回目は食物分野を学習中のクラスには、昔の食生活と現在の食生活への思いを、保育分野学習中のクラスには自分の妊娠・出産・子育ての体験を話していただいた。高校生にとって祖父母・親と同じ年代の女性たちの話は、今まで聴いて来なかった内容があり、出産の話では気恥ずかしくて下を向いてる男子生徒もあった。三回目は、新米を使ってすし料理にした。地域の人たちと一対一になってのすし技術はすぐに生徒に身についた。会食のとき、この学校の周りでの米作りの変遷を聞くこともできた。ほとんど住宅地に変わってしまった現在、この地域に長く暮らす人の思いが伝わってきた。

地域の方々は、生徒と接して、「素直でいい子たちですね」、「四年生になるともうすっかり大人ですね、しっかりしている」、学校の外からながめていた生徒像と、学校のなかで身近に接する生徒像との違いを、それまでの偏見払拭の思いを感動を交えて話される。

高校生は、「自分が地域の一人としてやらなくちゃいけないことやしなくてはいけないことを学んだと思う。やっぱり、地域の周りの人の名前も知らなかったというんじゃ、話にもならないから」（一年）と自分中心の生活を反省する。

あちこちから寄り集まって来た生徒たちにとって、学校の周りに暮らす人たちは知らない人たちばかりである。が、直接触れ合うことで、自分たちの子どもや孫と同じ思いで幸せな生活を送ってほしいとの願いを、地域の人々が自分たちに対しても持っているということが生徒たちにわかってくると、学校の周囲での騒音、ごみにも注意するようになってきたように思う。生活指導をどの視野から取り組むのかを考えさせられる。ともに生きる関係づくりの具体的な策を、さらに多様に、そして深めていきたい。

（たてやま・ちづこ／熊本県立高校教員）

お詫びと訂正

先月号の磯部幸江さんの「ラフ・スケッチ」（38ページ）の中で、教育課程審議会の中間まとめの記述に不要な「。」を誤って入れたため、反対の意味の記述となっていました。「技術と家庭は、別々の教科で衣食住、家族関係の領域を週二時間とって教えるという。私の夢はますます遠退いた。」この「。」を削除して下さい。磯部さんの夢、希望は「中学校で技術と家庭科が独立した教科として存在し、それぞれを週2時間の授業時間数とって教えること」です。お詫びして訂正します。

授業風景

風がかわる
匂いがかわる

「から芋餅」作りで地域を感じる

……永松　藤乃

熊本市から一時間半。国道3号線を車で南へ向かうと、美しい海と山に囲まれた芦北町に着きます。大野小学校はその町の中心部からさらに二〇分、山間の農村地帯（大野地区）にあります。全校生徒一〇〇名に満たない小さな学校ですが、子どもたちはみんな明るく元気です。

その大野小で、私は初任の四年間を過ごし、最後の年に一年生一三名を受け持ちました。

自然に恵まれた地域で、思い切り自然と触れ合い、季節を感じ地域を見つめる生活科の実践を行ないたいのですが、なにぶん力不足。探険や遊び、草花の栽培という通り一遍の事の他には何もネタがなくマンネリ化していました。「大野の地域を見直してみよう」。そこから私の生活科はスタートしなければなりませんでした（今考えると、すごく当たり前のことですが……）。

大野地区は大関山を源にする七瀬川を中心に水田が広がっており、昔から水田の開墾が行なわれていました。上流には丸石を積み重ねた棚田があります。「この部落の人は開墾するとき、泥の泪を流しながら作業したそうだよ。だからこの部落は『泥泪（どろめき）』と言うんだよ」と、最初に校区を案内してくださった校長先生が話してくださいました。その景色は、見た目も美しく素晴らしいものですが、同時に作業の苦労を思いやった時、

より深い感動を覚えました。

大関山を越えると、隣の鹿児島県はすぐです。西南戦争の時、薩摩軍は大関山を越え、大野を通って熊本に入ったそうで、薩摩軍が駐屯した寺が大野小のすぐ近くにあります。このような場所柄からでしょうか、大野地区は鹿児島県の文化の影響も深く受けています。そこで頭に浮かんだのが『から芋餅』です。

私が『から芋餅』の存在を知ったのは、熊本県家庭科サークルの例会でのことでした。から芋を使った鹿児島県のおやつ『ねったぼ』として知りました。ですから大野で初めて『から芋餅』を見た時、「『ねったぼ』ですね。おいしそう。ばあちゃんが作んなはったとですか」というと、「先生、『から芋餅』というとですよ。から芋ともち米ば、一緒について作るとです。食べなはらんですか」と、勧めてくださいました。食べてみると、やはり私の知っている『ねったぼ』で、きな粉をまぶして食べる食べ方も、作り方もまったく同じでした。『ねったぼ』のことを大野では『から芋餅』と呼ぶだけのことです。『から芋餅』は、今ではおやつ等でよく食べられています。

大野ではどの家も水田を有しています。子どもたちは、小さい頃から家の人の農作業の様子や稲の育ち方を目にしながら育っています。しかし、「田植えはいつしなはっかね」と尋ねると、「う～ん、わからん」と答えます。何月頃、田植えが始まり、何月頃、刈り入れが行なわれるか、はっきりと分かっていません。同じように、生活科で学校の畑に芋を植えるので、「みんなの家に芋の蔓があるかな。あったら少しでいいけん分けてもらえるといいんだけど……」と言うと、「分からんけど……。家に帰って聞いてみる」と答え、次の日にはたくさんの蔓を抱えて登校してきました。「家にいっぱいあったよ。持っていっていいって」と、言いながら差し出してくれます。

こんな具合で、子どもたちは農村に育ちながら、あまり実態が分かっていません。地域を見つめる子になって欲しいとの願いから、地域で採れる米とから芋から作られ、よく食べられている『から芋餅』の実践を行なってみることにしました。

学校の畑にから芋を植えているのですが、山の学校の悲しさか、猪に食べられてしまい、毎年ほんの少ししか採れません。そこで、畑を貸してもらい、芋を植えさせてもらうことにしました。「すみません。ほんの少しでよかですから、ばあちゃんの芋畑の端に芋を植えさせて

もらえんですかね」と都合の良い願いに、「はいはい、よかですよ」と快く貸してくださいました。

学校から歩いて一五分程の所にある畑です。当日行ってみると、黒々とした畑に畝が高々と作ってあり、ばあちゃんがにこにこ顔で待っていてくださいました。「よく来たね。大きな芋を作ってね」と、蔓の植え方から教えてくださいました。子どもたちは、「こっからここはボクが植える」と畑の中を走り回っていました。「蔓が土から出る」と、スコップを持って手を真っ黒にしながら、一本一本丁寧に植えていました。「大きな芋ができるといいね」「これは、ボクが植えた芋。分かんなくならないようにマークをつけとこう」と、棒を立てていました（しかし、この棒は芋掘りの時にはありませんでした）。

この時にも、ばあちゃんはおやつとして『から芋餅』を用意していてくださいました。「うちのばあちゃんも作るよ」と言いながら、子どもたちは口いっぱいにほうばっていました。一緒に出された『灰汁まき』も、「これも作ってくれる」「おいしい」と言いながら食べていました。元々は鹿児島の食べ物である『から芋餅』や『灰汁まき』が大野では、子どもたちにとっても身近な食べものになっているんだと実感しました。

学校から少し離れているため、毎日の世話や観察が十分でなく、ほとんどばあちゃんにまかせっきりとなってしまいました。それでも、子どもたちは、放課後や休日など畑を覗いていたようで、「昨日、ばあちゃんが畑で草を取りよったよ」「蔓がぐ～んって伸びとった」「葉っぱが大きくなって、畑が緑色だった」などと教えてくれました。

夏休みが明けて、すぐに練習の始まった運動会も終わり、子どもたちの学校生活も落ち着いてきました。秋も深まった頃、「そろそろ芋が大きくなりましたよ。掘りにこんね」と、ばあちゃんから招待がありました。

畑に行くと、「蔓をひっぱって土の中につながっているところに芋があるからね。そっと土をのけて芋を掘ってね」と、ばあちゃんから教わった通りに、子どもたちは芋を掘っていきます。「あっ、ここにある」「もう一つある」「あ～大きい。ボクの顔ぐらいある」子どもたちは大きな芋をどんどん掘っていきます。土を掘るときは何も話さず、じっと芋を見つめ、手を動かし続けています。一時間足らずで持って来た袋にいっぱいの芋が採れました。「重い。持ちきれない」と、えっちらこっちら袋を運んでいました。ところがとうとう「あ～、袋が破

れた」。結局、帰りは近所のお家の方に車で収穫物を運んでもらうことになってしまいました。

学校の裏から木切れを集め、運動場の隅で焼き芋をして食べるのにも少々飽きた三学期のはじめ、「『から芋餅』を作るけん、家から餅を一つ持ってきてね」と話しました。次の日、「忘れる人がいるかもしれんけん、二つもってきた」と、大きな餅を二つも三つももって来た子が何人かいました。いつも忘れ物が多くて困っていたのが嘘のような子どもたちの気の利きかたに、思わず笑ってしまいました。

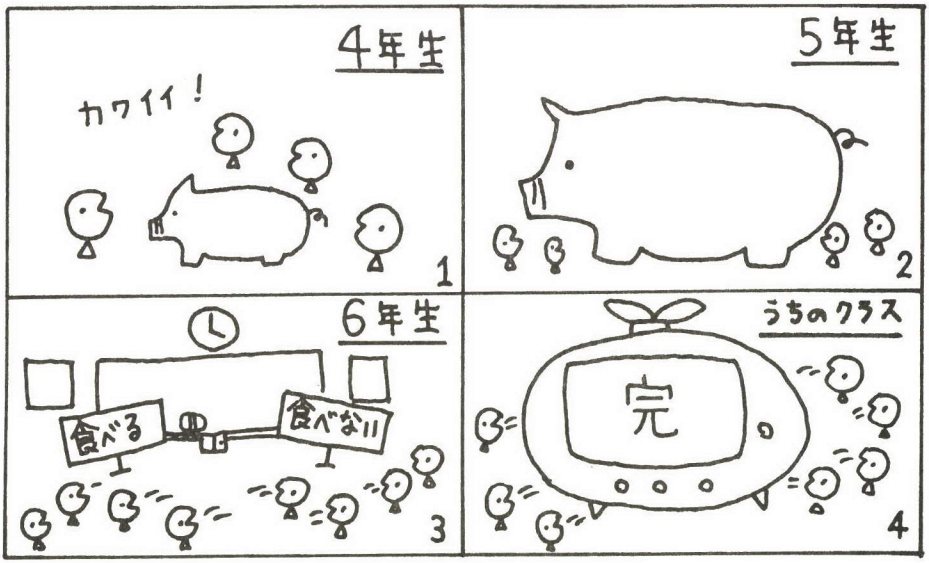
家庭科室に移って作業開始です。いつもは縁のない場所での作業に少々興奮気味です。私が芋を5センチ程の輪切りにして子どもに渡します。それをまな板の上に置いて皮を切り落としていきます。「わ～、こやー」と言いながらも「おっ、切れた。先生できたよ」と、得意気に一つひとつ見せに来ます。「上手にできたね。じゃあ今度はこれを半分に切ってごらん」と、火が通りやすいように半分に切らせます。「さあ、蒸すよ。切ったら持っておいで」「これでいいと」と自慢げに持ってきます。芋を蒸し器のなかに入れると、じーっと蒸し上がるまで見つめていました。餅を入れるために蓋を開けると、「お～っ、真っ白だ」「玉手箱みたい」と、湯気に大喜びです。「芋の匂いがする」と言う子もいました。蒸し上がった芋と餅をすり鉢に移し、すり棒で芋をつぶして餅と混ぜていきます。ペチャッ、ペチャッという音と、棒に粘り着く餅に、「あはは。おもしろい」「1、2、3……。はい、交替」と、作業はどんどん進みます。餅と芋が交ざったところで、一口ずつの大きさにちぎってきな粉にまぶしていきます。このきな粉も子どもたちが石臼で大豆を挽いて作ったものです。

「おいしい」「もう一つ食べていい？」「先生、あまったとはどうすると」「おみやげに持って帰るといいたい」「やったー」

次の日、「ばあちゃんが、『とってもおいしい。ばあちゃんが作るのよりおいしいね』っていってたよ」と子どもたちは笑顔で話してくれました。そんな子どもたちを見て、とてもうれしくなりました。

いろいろ不都合な点が多く、行き当たりばったりの実践でしたが、『から芋餅』を作ることによって、子どもたちは作業のはしばしに自分の家や大野を感じてくれていたと思い、自分では満足しています。

（ながまつ・ふじの／現在、熊本県中学校教員）



けれど、この後書いてもらった感想文には、「ぶたでも魚でも野さいでも、ぎせいになっているものがいて、初めて自分がいるんだというのがわかった」「食べるということにはすごい過程があったんだと思った」とあるように、生徒たちも僕も、〃生命をいただくことの意味〃は、ちょっぴり実感できた気がします。　(かとう・あきひと 私立中・高校家庭科教諭)

＊　　＊　　＊

社会科教師から家庭科にかわって3年目が過ぎようとしています。

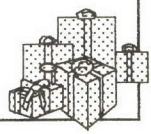
この間、くたばりそーになりながらも、職場の先生やＷｅの会の方々に、いろいろ支えていただきながら、なんとかここまでやってこれた感じです。

また、この「楽市楽座」やＮＨＫ「おしゃれ工房」など、「家庭科」を軸に、たのしく勉強になる機会を与えていただいて感謝しています。まだまだ「家庭科初心者マーク」の僕ですが、皆さんこれからもよろしくお願いします。

◎このコーナーでは、家庭科の授業や学活などでスグに誰もがマネできそうな皆さんからの〃掘り出し物〃（教材や教具、本、ビデオなど）をお待ちしています。使い方などを添えて、『楽市楽座』編集局：加藤昭仁までお便り下さい。(〒357埼玉県飯能市美杉台5-27-6, A-201 FAX 0429-71-0869)

楽市楽座

加藤昭仁



ビデオ(TV)「豚のＰちゃんと32人の小学生」
～生命の授業 900日～

「人間はね、他の動物や植物の生命を食べていきてるんだよね。〝いただきます〟は、仏教では生命をいただくって意味なんだよ」なんて、生徒たちにエラソーなこと言っておきながら、正直僕自身、こうしたことをホントに実感することって、なかった気がします。

そんな時、同僚のＩさんに、このビデオを貸してもらったのですが、これがい～のです。

内容は、ある日小学校４年生のクラスで、一匹のブタ（Ｐちゃんと命名）を飼うことになり、そのＰちゃんをめぐっての、３年間にわたるドキュメントなのですが、ケンカあり、笑いありの、作りものでない生の映像に、僕も生徒たちも釘づけになってしまいました。

中でも、クライマックスで、卒業を控え、今後Ｐちゃんをどうするか……といった件では、小学生の子どもたち、①下の学年に引き継いでもらう、②農場へ送る、③食肉センターへ送る、④自分たちで殺して食べるの４派に分かれて、激しい討論を繰りひろげます。話し合いは、卒業式前日まで続けられ、結局Ｐちゃんは、食肉センターへ送られることになったのです。

ビデオを観た後、早速クラス（中３）の子どもたちに感想を聞いてみたのですが、「これさぁ、この先生がよくないよ。だって最初にＰちゃんを食べるつもりだなんて、生徒に話してなかったわけでしょ。ペットとして飼ってた生徒は、殺せるわけないじゃん」「つらいけど、やっぱ最後は自分たちで食べなきゃよくないよ。かえってＰちゃんに失礼だよ。オレは絶対こんな結果甘いと思うな」と辛口の意見が続きました。

オホーツクの潮風荒く

江口凡太郎

年末に、連れ合いの千裕ちゃんは彼女の実家で、大きな元気な女の子を産みました。自宅分娩をさせてくれる、とてもすてきな助産婦さんと出会うことができたこと、母子ともに経過も良好であったことから、幸運に恵まれたお産だったと思います。

十日後に紋別に帰り、三人での生活が始まりました。まだ北海道は冬休みなので、私は一日中家事をやっています。生後二週間の我が子にとっては、親父が私でなくちゃいけない理由はなさそうですが、私にとっては、今まで感じたことのない我が子のかわいさが湧き出てくるような気がします。

昨日、生まれて初めて、三〇分だけ千裕母さんは外出、父と娘二人だけになりました。お乳は満タン飲んで寝てたはずなのに娘は母親が出ていってすぐ大泣き。セオリー通りおむつチェック。ウンコをしていたので早速おむつを交換。その最中に放尿、服に浸みたので別な服をさがしてる間にゲボッとミルクを吐いて首周りがデロデロ、もちろんその間も泣きっぱなし。「何で急にこうなるんだ！」とあせる私に、最後のとどめ、丸出しのお尻からウンコがにょろにょろ……どうにか着せて抱き上げてようやく静まったところに母さん帰宅。さっきの騒ぎがウソのように私の腕の中で眠る我が子はかわいいけれど、こんな調子がいったいいつまで続くのか？という気分にもなります。絵に描いたような新米親父と赤ん坊のコメディですが、自分もこんな風に育ててもらったのかもしれないと、自分を育ててくれた方々に改めて感謝します。

フォーラム後の燃え尽きていた時に受けたカウンセリングで、「こどもが産まれる頃また、熱中できるでしょう」という医師の予言通り、今はやや興奮気味で、子ども中心の生活をしています。この後何年も続く子育てと仕事のペースがうまくつかめるか？よくありがちな不安も感じています。

こんな、ちょっと落ちつかない新米親父の様子を見抜いた助産婦さん曰く「お子さんよりお父さんが心配ね」。これまで二千人以上のお産に立ち合ったというベテラン助産婦さんは二千人の子の親の姿も見てきたのでしょう。何もかもお見通しです。でも、見通されて、相談できる方に出会えたのは本当に幸運でした。

■連載

おんなが歳をとるということ

木村栄

昨年の九月、朝日新聞に連載中の藤堂志津子氏のエッセイには大いに共感した。体力・気力・思考力の衰えをはっきり感じて「もうトシだから」と言うと、同世代は「あと十年は現役の女のつもりなのに」と怒り、上の世代からは「二、三十年早い」と笑われ、若い世代には「あの世からのお告げ」と言われる。「もうトシだから、と口走っても、まわりから許して貰える年齢は一体いくつからなのか」という氏の嘆きは、同じように「人並み以下の体力で、どうにか今日まで持ってきた」私の嘆息そのままなのだ。

すでに「老後」みたいな私だが、高齢者と呼ばれる年齢までまだ七年ある。せめてそれまでは頑張ろうと思うのだが、高齢者になったらなったで、「トシだから」が許されるのは、まず八十代だ。それまで持つのだろうか。

四十代の頃だったか、タイトルも内容も覚えていないのだが、渋谷の映画館で見た映画の一こまが忘れられない。ワイドスクリーンいっぱいに、大地をひたすら歩く象の群れ。じりじりと地を焼く太陽、揺れる陽炎、熱く乾いた砂塵の舞う大地。ずしんずしんと地響きをたてて踏み下ろす象の足のズームアップに、ナレーションが重なる。

象の一生は歩き続けること。草を求めて歩き、食べつくしてはまた歩く。歩きながら子を生み、子は歩きながら成長し、死期が近付いた時だけ群れを離れて死地に赴く。永遠の休息をとるために。戻ることもなく、とどまることもなく、生きてる限り歩き続けなければならない……。そう、人間も。

気分が悪くなった。気が遠くなりそうだった。

最近、疲れたなあと思うと、よくこの映像が浮かぶ。あの時と同じようにじっとりと冷たい汗をかく。そして、死ぬまで持たないよ、と力なく呟く。

死ぬまで生きるためには、馬を走らせるニンジン、つまり生き甲斐が必要だ。二十年を維持できるライフワーク、それも年と共に衰える気力・体力・知力に合った、いつ中断してもいいライフワーク。そんなの、ある？ 探してみるか、ライフワークとして……。

シネマの魔

武田秀夫

雪の日に
ケン・ローチの「ケス」について

三日前の雪が溶けもしないその上に、朝からまた雪が降りはじめた。そのさまをあかずながめていたら、「とんだものが降り出しました。このごろどうもくせになって困ります」と女の声が心の底に立った。

あれは何だったろう。あれはたしか堀辰雄だ。奈良公園の馬酔木の花ざかりを見ようと東京を発った堀辰雄が、途中下車して泊まった木曽福島の宿の女中に次の朝そう言われるのだ。そして木曽谷に降る雪をながめながら汽車でなおも行くうちにいつか薄日のようなものが車内に射してきてわずかの乗客はわずかなそのぬくもりを慕うようにそちら側の席に移るが、堀辰雄だけは強情に席を動かないでいる。と、その窓から辛夷（こぶし）の白い花のむらがりが谷の高みに見える、とたしかそういうことではなかったか。

今日の青梅の雪は、しかし、昼になっても一向に降りやまず薄日のさす気配もない。春にはまだ遠い雪なのだ、花の気配もなくずいぶん寒そうだと炬燵にあたりながら小学校の校庭に降りしきる雪をながめていたら、以前に見て粛然たる気持ちにさせられた映画「リトル・オデッサ」（ジェームズ・グレイ）の厳しい雪の印象がよみがえった。

ブルックリンのブライトン・ビーチ、通称リトル・オデッサに若いヒットマン（ティム・ロス）が戻ってくる。が、暴力的な父親（マクシミリアン・シェル）と激しく憎み合う

男は家に容れられず、愛する母親（ああ、バネッサ・レッドグレーブ！）を脳腫瘍で、弟（エドワード・ファーロング）をも自分とマフィアとの抗争に巻き込んで死なせ再び町を去っていくのだが、そのガラス玉のように冷たい目をした男の心の底にひそむ悲しみ、氷りついたような悲しみとよく見合っていたのがリトル・オデッサの荒涼たる雪の景観だったのである。男は雪の原に父親をひざまずかせパンツを下げさせて後頭部にピストルを擬し、蹌踉と町に戻った父親は息子をマフィアのボスに売る――。全篇を流れる音楽もまた氷のように美しかった。

そしてケン・ローチの「ケス」。あれも寒い映画だった。ただし雪はなく、イギリスの炭坑町の乾いた寒さが強く印象に残る映画だったけれど。

彼の国の学制を知らないからよく分からないのだが、就職のための面接を少年たちが受けるシーンや校内で煙草をすったかどで校長室に呼びつけられた生徒たちを前に校長が「四年のあいだお前たちを見てきたがいつもいつも同じ顔触れだ」と怒鳴るシーンがあるからさしずめ日本で言えば中学三年生ぐらいの少年ということになるのだろうか。なにしろ主人公の少年は小柄で痩せっぽちなのにどこか少年を卒業しかけているような雰囲気もその表情にはあって年齢がよく分からないのである。

体育の時間にサッカーをすることになってグラウンドに集合すると、その貧弱な背格好はいっぱしの若者に育った他の仲間の中にあっていっそう際立ってしまう。しかも体育着を持っていないために懲罰的に教師から貸し与えられたパンツがこれはまたバカでかく、まるでふかぶかのぬか袋から枯木が突き出したように細い脛をさらしたその姿は、寒空の下、いかにも哀れで、とても勇壮なプレーなど期待できそうにない。で、教師はだれもやりたがらないゴールキーパーの役を彼に押しつけるが、草サッカーのキーパーなんていうものはグラウンドのはじっこの方でむき出しの手足をこすりながらひたすら寒さに耐えているしかない存在なのである。

あまりの寒さに少年はサッカーゴールにぶらさがり猿の真似などしてみる。とそれがまた教師の叱責を招く。ようやく転がってきたボールを蹴ればそのとたんに足をかかえ込み、「まるで鉄の球だ」と、やはり太っているために員数外の扱いを受けている少年にぼやく羽目になる。なるほど寒さでこちんこちんになったボールをあんな細い足で蹴ったらさぞ痛いだろうと、見ているこちらまで寒くなる。

試合は相手のシュートした球の方向とはまるで反対の方向に身体を飛ばせてみせた少年の拙劣な、しかしどこかわざとやったようなプレーのせいで教師の率いるチームが負

ける。腹を立てた教師は急いで帰ろうとする少年をつかまえて無理やりシャワーを浴びるように命じ、その上温度調節のコックを冷水に切り換えてしまう。氷のような水を浴びた少年は級友の嘲笑・歓声の中、痩せた身体をかかえてがたがたふるえているほかない。

ところでなぜ少年がそれほど急いで帰りたがるかといえば、彼は「ケス」と名づけた鷹を飼っているからだ。

ある日棒切れを振り回しながら森の中を行くうちに少年は、捕らえた獲物を巣へと運ぶ見事な鷹の飛翔を目撃しすっかり心を奪われてしまう。

どうしても鷹を飼いたい！

町に戻った少年は古本屋から鷹の飼育法について述べた本を万引きして読みふけり、とうとうたまらずに深夜家を忍び出て農場の崩れかけた塔によじのぼり待望のひなを手に入れる。そして訓練。

「ケス！カモン、ケス！」

家の裏手の野原で鷹にむかって呼びかけ訓練する少年の姿は凛々しく美しく、見守るこちらまでわくわくするような至福の感じが画面から伝わってくる。

早朝に新聞配達をして牛肉などの餌代をかせぎ、それから鷹の世話をして登校する少年は朝礼の最中に立ったまま居眠りをしてしまう。他の生徒は号令によって全員着席したのに少年だけは起立したままうつらうつらとやっている。その可笑しさ。激怒した校長は少年を校長室に呼びつけ、「未成年者喫煙同盟」（！）の面々共々、差し出させた手のひらに鞭で打擲を加える。こごえた手にあれをやられたらたまらない。たまらずに少年は両方のわきのしたに痛む手をはさんですくみこむ。まったくのことに、イギリス映画のこうした寒々とした印象はいったいどこから生じるのだろう、どういう性質のものだろうと、最近の「トレイン・スポッティング」（ダニー・ボイル）からかつての「長距離ランナーの孤独」（トニー・リチャードソン）まで、イギリス映画に特有のユニークな寒さの印象について、あるいはそのユーモアが内包するえもいわれぬ冷たさのよってきたる所以についてといったことにあれこれ思いをめぐらしたのだった。

お前たち貴族はお前たちのことをやれ。おれたち労働者はおれたちのことをするから。

厳然と階級の存在する社会の中にあってそれを変革するということはせずに、むしろそれぞれが自分たちの生活意識を強情に守る、そうした突き放したような生き方の中から生まれてくる独立自尊の気風、それが怒りよりも手強い不服従や冷たいユーモアを生むのだろうか。

父親は「蒸発」し、炭坑で働く母親とその母親が別の男

との間に生んだやはり炭鉱夫の粗暴な兄といがみ合いながら暮らす少年はけっして恵まれた境遇にあるとはいえない。にもかかわらず、かわいそうな子どもといった印象は全くなく、むしろその貧弱な身体の中に燃えている小さくはあるがだれも消すことのできない火、独立自尊の気概といったものが映画の進行につれて見る者の心をとらえていく。

授業中一人の教師がFact（事実）について語るようにと少年をうながす。すると悪童の一人が「こいつは鷹に夢中で、誰とも付き合おうとしない変人なんです」とからかう。少年は「お前よりいい！」と言い返すが、「鷹の話を」と教師に言われてぼそぼそと語りはじめるうちに熱中していき、生徒たちは生徒たちで少年の話にひきこまれていく。「初めて自由に飛ばした時が最高だった。一週間くらい足を縛って飛ばすんだ。本には30～40m離したら自由にしてやっていいと書いてあったけど勇気が出なかった。逃げないかと心配だったんだ。でもそんな自分に腹が立って決心したんだ。その夜はベッドに入っても全く眠れなかった。不安だった。そして朝になり、ぼくは自分に言い聞かせた。〝飛び去った時は諦めよう〟と」

鷹を手にとまらせたり放したりする身ぶりをまじえて少年が訓練の様子を語りつづけるそのシーンはほんとうに美しくぼくは涙ぐんだ。

「ケス！カモン、ケス！杭にとまった鷹を呼んだけどダメだったので戻ろうとしたら、その時、ものすごい勢いで飛んだんだ。地上一メートルの高さを電光の速さで。音もさせずに。そして手袋をしたぼくの手にとまり、餌を取った」

そう語り終えた少年にクラス中が拍手をし、感動した教師はその後少年の家を訪れる。

少年は鷹小屋の中で教師に言う。小さな哲学者のように。

「散歩に出ると言われる。〝ビリーとペットの鷹〟って。でもケスはペットじゃない。〝飼いならしたの〟と聞く人もいる。冗談じゃない。ケスを飼いならすなんて無理だ。獰猛で超然とした鳥なんだ。ケスはこの僕さえ気にかけない。だから凄いんだ。僕は姿を見て空に飛ばせれば満足だ。今だって僕はケスの姿を見させてもらってるんだ」

貧しく小柄なこの少年は卒業後どうやって働きどうやって生活をたてていくのだろう……。そうした懸念はしかし無用だということをケン・ローチは静かに告げている。心に一疋の〈飼いならされない若い鷹〉を住まわせた少年に、同情などというやわなものは侮辱でしかないのだ。

ラスト・シーンをわざとぼくは明かさない。ぶっきらぼうなラストに息をのみ、イギリスの映画作家ケン・ローチの勁さ、真骨頂をそこに見たとだけ言っておく。

いきいきぐんぽ

桑田良産

正月の遊びで思い出すのが「凧上げ」だ。「凧」といってもねき（近く）の駄菓子屋に売っていた。5円のやっこ凧。10円のやっこ凧。20円のテレビの主人公を凧にしたやつ（思い出すのは、月光仮面・七色仮面・ナショナルキッドである）。「凧」を買ってきて、先ず足と手をつける。小遣いがないときには、新聞紙をはさみで細かく切って足と手にする。しかし正月以後は、お年玉があるので色付きの紙テープが買えるのである。新聞紙の足と手は、重いのかどうか分からなかったが、風の抵抗もあったのかバランスが悪くなり、風に乗りにくかった。

「おっさん」（著者）は、色付きの紙テープが欲しくてほしくてたまらなかった。当時の子どもにとっては、ぜいたくなものであった。「しんぶんがみをつことき！」がばあさんの口癖だった。色付きの紙テープ（赤・黄色・緑）を長めに切って足に5本くらい、両手に2本ずつ付けるのである。高く舞い上がり風にのることを期待してワクワクして準備をする。凧糸の長さは、忘れてしまったが相当長かったように思う。かまぼこ板に糸を巻きつけていた。

駄菓子屋の「凧」をそれぞれ試したが、一

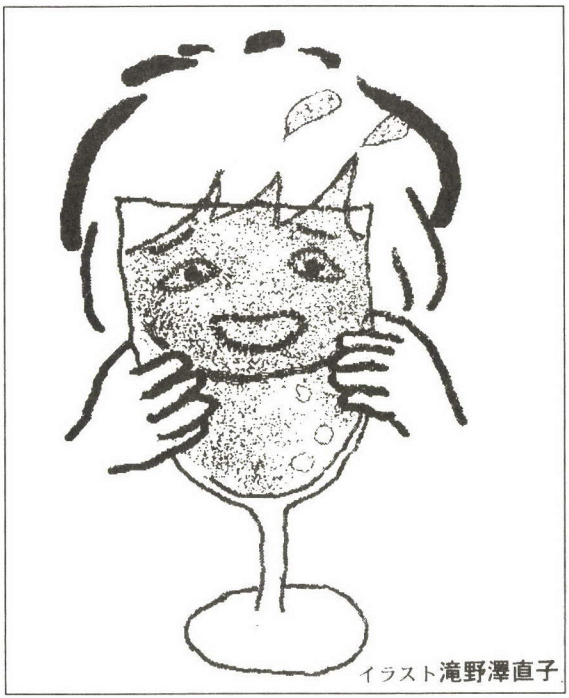
番高級な20円の「凧」は、大きくて見てくれも立派だったが、何と頭がついていて、こいつが結局重くバランスが悪くなり一度舞い上がっても安定して泳がずに落下するのである。10円の「凧」もよく舞い上がったが高さには弱かったように思う。ある高さを越えると急降下するのである。実は、5円の「やっこ凧」が最高であった。「あがる！あがる！風に乗るとぐんぐん上がり、はるかかなたに行ってしまう！」バランスの良さでは、天下一品であった。見えなくなるまで空に昇る？のである。風が出てくる頃と場所を見計らって近所の子どもと「凧上げ」に行く。すぐ凧が風に乗り始めると糸をどんどん出す。するとアッという間に「凧」は空に舞い上がって行く。子ども同士お互い競争するのである。しかし、時として糸が切れて「凧」がはるかかなたに行ってしまった。「おっさん」も子どもの時に3匹の「凧」をなくした。近所の子どもも同じでたいてい何匹かなくしていた。この見えなくなるほど「凧」が舞い上がって糸を持っている時の気持ちは最高だ。手に強烈な手ごたえが伝わってくる。風を感じる感覚だ。自分と風はひとつだという気分だ。糸が切れて「凧」がどこかに行ってしまっても、気分は最高だった。その高さまで「凧」が上がったことがうれしかった。大人になってからゲイラ・カイトをやってみたが垂直に飛ぶだけであいそがない。長い滞空時間にも耐えられないし、手も足もつけんでいいし。ワクワクしなくなった。カイトではなくてやっぱり「凧」だ。それと昔ほど風が吹かなくなったように思う。これも地球温暖化の影響か？最近、時々、子どもの時の「凧上げ」の夢を見る時がある。〝真っ青な空に「凧」がどんどん点になって吸い込まれて行く……〟。

♪♪　びゅわん　びゅわん　びゅわん　びゅわん　びゅわん
　　びゅわん　びゅわん　びゅわん　びゅわん　びゅわん
　　風よおまえはどこから吹いてくるの　風よおまえはどこから吹いてくるの　♪♪

（くわた・よしひこ　豊能図書館館長／題字・版画とも著者）

変な子じゃないよね

文－滝野澤直子


イラスト滝野澤直子

生きてる。助かったんだ。

ＩＣＵのベッドの上でぼんやり目を覚まし、自殺が未遂に終わったことを知った。

私、ホッとしている？　何年間もずっと死んでしまいたいと思いながら生きてきて、遂に窓から飛び降りたというのに。死ぬつもりだったのが嘘のように、生きていることがうれしくてたまらなかった。あんなに重たかった絶望感も無力感も、窓から飛び降りたその瞬間にあとかたもなく消えてしまったかのようだった。

たぶん私が望んでいたのは死ぬことではなくて、それまでの自分を壊すことだったのだろう。自分にはどうしようもない大きな力に左右されつづけてきた自分。窓から闇へと飛び込むことで、私をしばっていたあらゆる力を断ち切って、自由になりたかったんだ。つらくて恥ずかしくてうつむいてばかりのいままでの私はもういないと思うと、とてもうれしかった。やっぱりみんなには不慮の事故だとごまかしてしまったけれど、心の中では、飛び降りたことは私にとって必要なことだったと認めていた。

首を骨折し、神経も切れた身体は胸から下の部分が麻痺して、足も手の指も動かなくなった。車いすに乗るよう

になってからの毎日は、もう一度人生をやり直しているようで、まさに感動の連続。動かなかった腕を訓練し雑誌を一ページずつめくれるようになり、フォークを口に運べるようになり、ズボンが履け、パンツも履けるようになり、ひとつひとつの動作を獲得していくたびに生きていることを実感するのだった。うんちの世話もしてもらうようになった。お風呂も人に入れてもらうようになった。たくさんの人が私の肌に触れ、一日に何度も人と会話をする。それは小さなころから憧れ、あきらめかけていた温もりによく似ていた。

空腹のときに少し食べるといよいよお腹がすいてくるように、人の優しさを手に入れだした私は、もっともっとと求めるようになった。泊まり込みで付き添ってくれた母が、五分でも病室にいないとイライラした。ある日、母に鼻をかませてもらっているとき、なかなかうまくかめなくて、車いすの横で立って介助していた母に八つ当たりした。

「どうして、ほかのお母さんみたいに、ここに跪いて、親身になって介助できないの！ お母ちゃんは、いつもそんなふうに冷たかったよ！ 小さいときから、いつもいつも」

言い過ぎだった。決して優しくされてこなかったわけじゃない。ほかのお母さんたちが膝まづいて介助していたのでもなかった。でも、あんなに得意だったはずのいい子の顔が、なぜか作れないんだ。もっと聞いて。もっと優しくして。もっと考えて。もっと甘えさせて。もっと、もっと、もっと。ずっと言えずにいた気持ちが溢れ出て、泣きながら怒りながら、しわがれていた心がぐいぐい水を吸って膨らんでいこうとするのを感じていた。この叫びは、幼いころの私の叫び。飛び降り、自分で殺したはずの過去の私が、今、身体を突き破って、わかってほしくてたまらなかった思いを声にし始めたのだ。

泣いて食ってかかった私の横に、母はなにも言わずに膝をついて、鼻水を拭いてくれた。寒い家にひとり残された子供のように、震える手で拭いてくれた。

（たきのさわ・なおこ）

このままではいけない？

吉原令子

——留学でみえてきた母との関係（2）

私と母の共通点といえば、今では電話の声だけである。幼い頃は母が洋服の仕立てを注文する時は必ずといっていいほど、同じ布で私もワンピースをつくってもらった。その頃のセピア色になった写真をみると、どれも大きなリボンやフリルがついたものばかりだ。それらの洋服を着て外出する時はいつでも周囲の人から「女の子らしいわね」と言われた。私は女の子らしくしていれば母からも周囲の人からも褒められた。私は母から料理を教わったり、編物や刺繍を教えてもらったり、一緒に洋服を買いに行ったり、世間の人がうらやむほどとても仲のいい母娘であった。

そんな私と母だったが、私がアメリカに留学する頃には似ても似つかぬ親子になってしまった。私は、お見合い結婚をして子供を産んで夫と子供のためだけに自分の生を費やす母の生き方が受け入れられなかった。結婚や出産だけでなく、なにかもっと違った人生があってもいいのではないだろうか

と思っていた。私が母の生き方を受け入れられなかったように母も私の生き方が受け入れられなかったのだろう。「結婚して子供を産むことが女の幸せなのに、アメリカに行って何をしようとしているのだろう?」と母は私のことをつかみどころのない、わけのわからぬ娘と思っていたにちがいない。

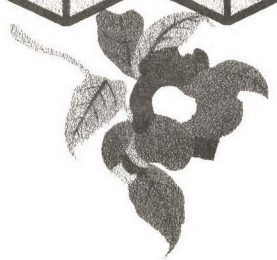
渡米してから、私と母は手紙や電話で日常の出来事の話はするものの、ボーイフレンドや結婚や子供のことについてはまったく話をしなくなってしまった。私はルームメイトが母親に電話してボーイフレンドの話を延々としたり、家に招待したりするのを見てとてもうらやましかった。私自身は結婚のことも子供を産むこともあきらめたわけではなかったが、適齢期を過ぎたら婚期を逃すと信じている母はすっかり私の結婚のことをあきらめたのだろうと思っていた。だから、母は一切結婚の話をしなくなったのだと私は思い込んでいた。

留学してから2年ぐらいが過ぎたある日、私よりも3つ年上のいとこの結婚式の様子を手紙に母が書いてきた。「先日、達ちゃんの結婚式に行ってきました。とても素敵な結婚式でした。達ちゃんのおばちゃんはもちろんのこと、おじちゃんも目に涙を浮かべていました。さぞ、うれしかったのでしょう。そんな姿をみて、お母さんもちょっぴりうらやましくなってしまいました。しかし、あなたにはあなたの人生があるのだからと思っています。アメリカではいろいろと辛いことがあるかもしれませんが、あなたが選んだ道です。がんばってください」とあった。

私は母が私には私の人生があり、自分とは違った人生を歩もうとしている娘をひとりの人間として認めようとしてくれていることがうれしかった。そして、夫と子供のために尽くすことが幸福と考え、実際に幸せならば、それを私がとやかく言う問題ではないと私自身思えるようになった。幸せとは他人の物差しで測るのではなく、自分の物差しで測ることなのだから……。

（よしはら・れいこ　大学講師）

蔦森樹の巡業日記



蔦森　樹（タツル）

みなさんお元気ですか。巡業もだいぶ回を重ねましたが、はっきり言えなかったこともたくさんありました。そこで今回は、その中でも一番「言いたかった頻度」が高い、講演先で必ず受ける質問「なぜ、女性の格好をするのですか？ スカートは女性の行動の自由を妨げるし、ハイヒールは纏足、お化粧や長い髪は男に媚びるためだし……。なぜ、わざわざそんな抑圧的なことをしてるのか？」についてです。

この質問が挙がる度に「出たなっ！正しいフェミニスト」と心の中で戦闘開始のスイッチが入り、体がさっと緊張。外からは見えないだろうけど腋の下にはびっしょり汗をかいていました。私にとってこの質問は（当然受けるだろうけれど）最悪で、こういう体の条件反射をするのだから、それは自分の生存の危機に匹敵していたわけです

それを言われるのが嫌なばかりに、90年に講演を始めた頃はパンツルックにスニーカー、メイクは地味にしたり、その後は「そんなに言うのなら文句のない服や靴を買ってください。それを着るから」（誰も買ってくれなかった）、必死の説明で疲労してしまうので「だって好きだから！」と言い切ったり……いろいろやりました。

でも、この質問が最悪な理由が最近やっとわかりました。それはフェミニズムとかジェンダーとか言う以前に、『なぜ？』と聞く人は、すでに自分の側に正解があり、思い通りにならない相手を悪いと裁いて責めている。『なぜ？』自体がお互いの関係に緊張を作りだすから。今ではその類の問を受けると「どうしてだと思います？」と逆質。代わりに考えてもらっています。

「なぜ」の代わりに「女性のようにしているあなたに何が起きているの？」と聞かれたら、私は和んで答えることができるし、その人と笑ってつながっていくこともできるのに。残念だなぁ。これからはそこのあたりを丁寧に扱ってゆこうと思っています。

居場所考34〈丘の上の家〉

水田宗子

一九六七年に一時日本に帰ってきた時、私は「赤門アビタシオン」という名のマンションに二年ほど住んだ。マンションという言葉が定着しはじめたころだったが、そのあまりに小さいアパートを、口にする度に冗談として笑わなければ、なんとしてもマンションとは呼べなかった。そのうちに小さな住まいには慣れてしまったが、マンションという呼び名には違和感がつきまとって、アメリカ風に、そして戦前から私たちに親しいアパートでいいのにという気持ちは変わらなかった。アビタシオンというのもいけなかった。そのマンションは曹洞宗のお寺がその境内に建てたもので、窓からは墓地が見える。お彼岸やお盆ともなれば、そこは一面花と線香の煙りにおおわれて、アビタシオンとはなんとも似つかわしくない風景となるのだった。

それにしても、マンションという呼び名にも、マンションをドマーニやハイツやタワーなどと呼ぶことにもすっかり慣れてしまって、一九七〇年代、八〇年代と新しい高層住宅は競ってファンシーな外国語の名前をつけ続けた。不況の九〇年代になっても、その傾向はすこしも変わらない。もっとも、私はといえば、アビタシオンから転じて「実用本郷マンション」というダサイ名前のマンションに住んでいるのだが。

東京や郊外の住宅地の地名から、谷、窪、淵などが消えて、丘や台が増えはじめたのも、ファンシーな外国語のマンションの増加と軌を一にしている。東京は丘や谷のあちこちにある起伏の激しい街で、坂が実に多い。そのため地名も、坂上、坂下、下谷などという単純なものから、赤坂、神楽坂だの鶯谷、茗荷谷だのと凝った（？）ものまで、地形の起伏を表わすものが多かった。

それらの明白な地形の表象としての地名がだんだんなくなって、わかりやすい住所や場所の記号として地名が整理され統合されていった。そして、明らかに不動産としての価値の重視からだろうが、暗いイメージの漂う地名や、その地域の住民の職業などを指し示していた呼び名が消し去られて、花の名前や光や緑など、明るくモダンなイメージを喚起する地名がつけられるようになった。農地や山や林を切り開いてつくられていった郊外には、昔からの地名があったはずなのに、それらは近代的で高級感あふれる住宅地にはふさわしくないらしかった。

マンションの場合は、ファンシーな外国語がかならずしも高級な住居を表わすとは限らないのは誰もがもう知っているが、住宅地の場合は、地名と階層が結びついた、新しい階級による住みわけのようなものが見られる。ある時期、若者たちの間で、ダサイタマとか、自分の車を品川や横浜ナンバーにしたいとか、あるいは㊎とⓑとか、あからさまに「金持ち＝カッコいい」、「貧乏＝ダサイ」といった区分けを楽しむ露悪的な現象があったが、住宅地の階層化、階級化もあっという間にまぎれもない社会的現実として定着し、それとともに、そのような現象をからかったり揶揄したりする、偽悪的で自己嘲笑的なジョークは姿を消してしまった。人々はジョークではなく、本気で坂や丘の上に住むために努力している、ということなのだろうか。

アメリカに長く住んだ私には、そこで住む場所や地域が住む人々の階級や階層、人種や民族を指し示す明白な記号となっていることに嫌悪感を持ち続けてきた。それは自分の住む地域に違う人種や階層の人々が移り住んでくることへの拒否反応と密接に結びついていて、カントリークラブやフラタニティなどがメンバーを選ぶのと同じように、住む場所、ストリートにいたるまで、自分がそこの住民によって選別の対象とされるばかりか、そこに住むことは彼らと同じ生活のスタイルや価値観を共有していることの表明になるという不快さを喚起させられる。住む場所がそのように露骨に記号化される社会こそ、差別社会だと思わざるをえないのである。

坂の上は明るいし、眺めもいいだろう。しかしそれ以上に、住民の階級や階層という付加価値が不動産の価値に反映される場所を住居として求めることが、ⓑ の市民までをバブルに巻き込んでしまった元凶のような気がする。アメリカの郊外は、一九六〇年代に、若者や主婦の心の病気の要因となっているとして、社会的、文化的な問題とされて脚光を浴びた。郊外に住む中産階級の家庭の子供たちが麻薬中毒になり、家に閉じ込められた高学歴の主婦がノイローゼやキッチン・ドリンカーになる。それらの現象や不安や危機感は、六〇年代のアメリカ文学に色濃く反映されて、テーマ化されたのだった。

少子化が進む現代日本での郊外生活や郊外文化の中で育って、その内的、外的環境を描く若い世代の文学作品が、たくさんありそうに思えてじつは少ないのは、すこし物足りない気がする。その意味でも、郊外と都会の間に生き方と感性による線を引いて、現代に生きる女性——若者の内面を、家族とトポスとの関係においてドラマ化した、柳美里のいくつかの作品、例えば『フルハウス』『タイル』などが、私には新鮮に感じられるのである。

（みずた・のりこ）

Ｗｅ夏季フォーラム97 分科会報告②「高齢者協同組合はなにをめざすのか」

Ｗｅ兵庫の会・入江一恵

「高齢者協同組合」ってなーに？まだ一般にはよく知られていない。講師の高瀬毅さんは、生まれて動き出したばかりの高齢者協同組合こそ21世紀の福祉の地平を切りひらくものと受けとめ、全国を丹念に取材してまわった。今回はこれに加えてＡＡＲＰ（全米退職者協会）への現地視察の結果もふくめての報告であった。

＊　＊

「高齢者を暗いイメージでとらえていたが、現在は単に高齢者の数が増えているだけではなく、いままでのイメージを壊す新人類が増えてきた。「不老革命」とタイトルをつけてもいい感覚である。高齢者協同組合とはもともと日本労働者協同組合の失業対策事業として始まったＮＰＯ。働く意志のある高齢者がそれぞれ出資して協同組合をつくり、自分たちで仕事を起こし、自立した生活をつくり出そうというもの。公助・自助そして協助ということになる。まさに高齢者が主人公ということで三重県に一九九五年二月、その第一号が設立された。設立準備会に集まった高齢者の熱気には圧倒されそうで、現在（九七年八月二日）、全国で一三都府県に設立されている（その後、九月に一五番目が大阪で設立）。その事業内容は多彩、ヘルパー派遣、給食サービス、産直事業、平飼養鶏、とうふ製造、葬送事業など。（注　日本労働者協同組合とは、最近よく耳にするようになったワーカーズコレクティブのひとつ。医療、福祉、環境関係の委託事業が多いが「病院で死ぬということ」の映画制作などユニークな事業も手がけた）。

海外での新しい動きとしてアメリカのＡＡＲＰの活動について紹介する。高齢者の「独立」「尊厳」「自立」をもった生活を支えるための非営利組織、会員三千万人、年会費八ドル、創始者はカリフォルニア州退職女性校長、活動の三本柱は①会員サービスとして団体健康保険、各種情報提供など、②地域サービスとして雇用プログラム、税金申告など、③立法政治活動として一人一人の議員への働きかけ、政府への要求活動などを活発におこなっているＡＡＲＰの活動の様子は、ＮＨＫで放映されたＶＴＲを見ながらの説明で、ダイナミックな高齢者の活動に驚いた。ちなみにクリントン大統領も会員の一人だとのこと。

高齢者問題をフォーラムの分科会でとりあげたのはたしか四回目、私は今回、自己紹介の中で参加者自体に大きな変化があることに先ず驚いた。一九九〇年、伊豆長岡で行われたフォーラ

ムでは、北欧福祉視察を前に「どう生徒に高齢化社会を教えるか」、先進国の取り組みをこの目で見たいという思いが語られた。あれから七年、まさに今昔の感があった。あの時コペンハーゲンのプライエムで目をきらきらさせて質問していた鹿児島の特手さんは、中学校を退職して、昨年、地元で28名集まりワーカーズコレクティブを起こしたという。学童保育からヘルパー派遣まで、〝家事支援ワーカーズコレクティブ愛ちゃん〟が船出である。京都の村岡さんは勤務する短大で介護福祉コースを設置させたという。その他、地域福祉への取り組みの報告。また、男も傍観者ではいられないと団塊の世代の男のネットワークが動きだしたと吉田清彦さん。日本の高齢化の現実が私達を動かしたのか、参加者が現実に自分のライフワークとして動き出したことが見えた分科会であった。また高齢者問題といえば北欧という定番からアメリカの最新情報が聞けたこと、また、日本の高齢者の新しい動きを知ることができたことは収穫であった。

終わりに一言、この分科会中に緊迫した空気が流れたことをつけ加えておきたい。高瀬さんの在宅介護の話の中で出た、男性高齢者の訪問女性ヘルパーに対するセクハラ的な行為について、吉田さんより「高瀬さんの発言に問題あり」との指摘があった。これに対し高瀬さんから在宅介護はきれいごとではいかない。このようなものまでかかえ込んでの在宅介護であるということを言おうとしたのだとの発言があり、一瞬、緊迫した中で参加者各自が自分の胸に聞いてみるといった時間が流れた。「高齢者の性」ということもきちんと話し合う必要があると思った。

鹿児島県　特手ナツ

各地の高齢者の活動を聞き、自分の両親を看とった時のことなど思い出した。ここ、二、三年、地域の福祉の受け皿も変わってきたが、もう家族で支えあっていこうとしても、自分たちの力だけでは限界があることを感じている。私たちはもう具体的に動かなきゃいけない所にきていることを声を大きくして訴えたい。

大阪・吹田市　星野英子

聞き慣れない題であり、少し迷ったがここ数年関心が強いこともあり、この分科会に参加した。私もつい先月、高齢者の仲間入りを果たしたが、趣味だけで生きがいがもてないのではないか。他者との新しい関係づくりの中で生きていくことを考えている。

分科会の前日、講師の高瀬さんに紹介してもらって、高齢者協同組合傘下の旭川市内の二施設を見学した。障害者も生き生きと調理配食サービスをしている姿に、確かに拡がっているなと実感した。

Ｗｅ関西の会　秋の例会（11月30日）の報告

Ｗｅ関西の会・南野忠晴

関西メンズリブ運動の重鎮の一人、立命館大学の中村正さんに「家族の見方」という題でお話をしていただいた。参加者は、例会は初めてという人も含め25名。講師の中村さんはあちこちの講演会で引っ張りだことというだけあって、難しい内容の話であるにも関わらず、ユーモアを交え、わかりやすく楽しく聞かせてくださった。話に説得力があったのは、彼が社会病理学を専門としているからというよりは、実生活で事実婚を選択し、子育てにも主体的に関わり、行政などとも戦ってきた「生活実践者」である、という部分が大きいと思われる。講演の内容は多岐にわたり、ここではとてもまとめきれないが、とりわけ印象深かったことを二、三紹介しよう。

一つは、中村さんご自身の「子連れアメリカ単身赴任（?）」の話だ。パートナーとの話の行きがかり上でそうなったとはおっしゃっていたが、「父子家庭の父」としてアメリカ社会に入り込んでいくことで、単に研究者として渡米したのとは違ったアメリカを見てこられたようだ。頭の中に「いろいろなカップルや家族がいて当たり前」という知識を持っているということと、「それらの現実を生きる人々の間で過ごす」ということとの間には計りしれないほどの距離があったという。小さな子ども連れであったからこそ生まれた人間関係の話もおもしろかった。

もう一つは、家族をどう捉えるかということだが、歴史的に見て、今は家族の絆がもっとも強い世代になっている、とみる見方だ。今は多くの家族が少人数で孤立している状況だ。当然のことともいえるだろう。しかし、人間関係としては、それは正常なバランスを欠いている。要するに、親が強くなりすぎたのだ。家族員以外との関係が希薄な中では、以前なら容易だった「親のダウンサイジング」つまり、「強く大きく見える親であっても、長所も欠点も備えた自分とさほど変わらない人間であると捉えること」が成長の過程でできなくなっているというのだ。

処方箋の一つとして、河上紀子さんが98年1月号の「家庭科屋台村」に書いていた「家族解散式」の話もあった。「親心あれば下心あり」なんてうまいこというなあ、と感心させられたあと、参加者一人ひとりが自己紹介をした。

みんな、家族に関しては話したいことが山のようにあって、一通り話したら時間が無くなってしまったが、それもまたそれぞれの胸に落ちた。参加した一人ひとりがそれぞれの宿題を持って帰ることになった例会だった。

神戸女性フォーラムのお知らせ

◎日時　3月15日10時～4時30分
◎場所　神戸市生活学習センター
（JR神戸駅）参加費無料
●分科会（10時～12時）
「こんな広告あったっけ？
見て、気づいて、声をあげよう」
◎共催　We兵庫の会／CMの中の男女役割を問い直す会／イーブンネット・神戸
◎講師　宮脇初恵さん
（メディアウォッチング香川）
＊We夏季フォーラム98に向けて、中国四国地方との運動のネットワーク作りの意味も込めての企画です。
●交流会（午後3時30分～4時30分）
「グループワーク
欲しいものと必要なもの」
＊家庭科の森学園でも実践したユニセフ作の交流ゲーム
◎担当　We兵庫の会の小林由佳さん
●全体会（1時15分～）講師 遥洋子さん

We夏季フォーラム98 in 倉敷

◎実行委員よりお知らせ

日程　7月31日（金）～8月2日（日）
場所　倉敷　石山花壇

現在、岡山実行委員会を企画中。当面、岡山の世話人、市場恵子さんが人集めを引き受けてくださっています。「岡山は30代の元気な女性がいっぱいいる。楽しくできそう。染め物、人形劇、ボディーワーク、座禅を教える外国人和尚さん、松山のタイ人女性裁判支援の話など企画もいっぱいある。長島愛生園も近い。倉敷は景観も良く、牛窓は風光明媚。飲むところ食べるところもいっぱい。十分ご期待ください」との力強いお言葉をいただいています。

◎1月18日に市場さん宅で実行委員会準備会。関西からは河上紀子（事務局長）、入江一恵、吉田清彦、中村英之の各氏が参加しました。
●実行委員会についての問い合わせは河上紀子（06-493-4231）まで。
◎恒例の「家庭科の森学園」はフォーラムと合体して開催の予定です。

＊　＊

東京　白崎淳子

アメリカ・カリフォルニア州で始まった、重度・重複障害児のための教育プログラム「MOVE」の普及を図るため、NPOである「MOVEインターナショナル」の日本支部として、現在活動しています。その「MOVEセミナー」を3月14、15日に東京で開催します。専門家や訓練に振り回されずに、障害児とその家族がより豊かな生活を送るために、家族や周りの大人は何をすれば良いのでしょうか。その答えを探しにセミナーに来て下さい。講師はプログラムの創始者であるリンダ・ビダベ先生です。詳細は（tel/fax03-3967-4394）までお問い合せ下さい。

★夜の箱庭療法の勉強会に出るため、家事は夫にお任せ…のはずだった日、学校から娘が熱を出しているという連絡が入り、諦めて家に戻った。洗濯物を取り込み、夕食を作りつつ、「本当は夫がやるはずだったのに…」と不満を募らす。後から帰った夫は娘の看病をするでもなく、家事を手伝うでもない。そのうえ食事の後、汚れた食器をそのままに当然のごとく去って行った時にはプッツン！ 私ってひとのお世話をすることに喜びを感じられない主婦だってことを再確認。(山下)

♠1月後半は降雪に恵まれた？日々でした。夜の9時過ぎ、雪にまみれてはしゃいでいるらしい幼児の声が聞こえたりするのはなんとも好いもので、用事もないのに出歩いて降ったばかりの雪の感触を楽しんだのに、まだ寒さが続く…もっと寒くなるのか…と思うと滅入ります。中学生らしき男の子が雪のお地蔵さんらしきものを大事に抱えて歩いていたり、どろどろ雪の中で夢中になって盛大に足踏みしていたり、そんな光景にささやかな喜びを見つけて春を待っています。(吉田)

★蔦森さんの巡業日誌の中に、「スカートは抑圧的だ」と言われたというくだりがあったが、ワークショップでファッションショーをやったとき、スカートを初めてはいた男性が、「すごく解放感がある。これから家でもはこうかな」と言った。私の易の師匠は、70を過ぎているが、しかもどこから見ても男だけど、やはりスカートを時々はく。そのまま外に出て行っちゃうので、近所に住む弟子(男)から「その格好で外には出ないでくれ」と言われると笑っている。抑圧も解放も本人次第？ (河村)

♥ずいぶん昔、河村さんとやり合ったとき、あきらめた風情で「あなたと私は楕円の二つの中心で絶対重ならないんだ」と言われた。片や明晰、片や混沌。編集もカウンセリングも混沌に耐える力と明晰にする力との両方が必要。仕事と相棒に鍛えられて、河村さんはだんだんいいかげんになり、私も必要とあらば明晰にもなれるようになってきた。そういえば、家に帰ってもまた別の強力な楕円の中心がいる。補完関係なのか、天敵なのか、天敵と言えば、野口整体によると私の体癖は三種十種で天敵関係の組み合わせで自分の中で年中バトルを繰り返すそうだ。ああ、なんだか疲れてきた。(稲邑)

♣その楕円の中心に生まれる隙間に私が生息しているわけでして、これがなかなかバランスがいい。稲邑さんの「あの・その」会話にも別に不自由しないし、河村さんのドライさにも刺激を受けつつ、日々学び、働き、けなげに生活しております。思っていることを伝えるのも、その言葉の使い方、理解の仕方や感じ方、距離の取り方、怒り方などはいろいろで、自分がいかに狭いパターンしか知らなかったかに気づきましたが、みな正直者だから安心して自分を出せるわけで、外で仕事するときは結構バリアをはりますね。(中村)

◆ほとんどの方はこの号で予約が切れます。ぜひ次年度もご継続くださいますようお願い致します。例年お振り込みが遅れる方が多いので、お断りがなければ5月号まで引き続きお送りしています。中止の方はお手数ですが、ご一報ください。

◆4月号の特集は、「居場所」をテーマに、<「場」をひらく>です。

くらしと教育をつなぐWe　60号（Vol.6　No.10）1998年2月1日発行
〒154-0001　東京都世田谷区池尻3-2-3-703　TEL／FAX　03（3424）3603
E-mail　femix@mail2.alpha-net.or.jp　郵便振替 00130-7-754314（有）フェミックス
定価630円（税込み）年間購読料6800円（送料共）　富士銀行 池尻大橋支店 普1501277
発行／フェミックス　編集／稲邑恭子　中村泰子　吉田静恵　印刷／（有）イー・エム・ビー

FEMIX INFORMATION

一年間のご愛読ありがとうございました。

年間講読料の切り替え時期です。
お早めに講読の手続きをお願いします。

早いもので、97年度も今号で終りを迎えます。本当に皆様にはお世話になりました。ここにあらためてご愛読に感謝申し上げます。「Ｗｅ」を気に入っていただけますようでしたら、次年度もよろしくおつきあいください。
98年度も、特集では「くらしと教育をつなぐ」さまざまなテーマに迫ってみたいと思います。教育、福祉、性、家族、民族、コミュニケーション、稼ぐ・働く、環境、食、衣、住、フェミニズム……どの切り口で迫るかは、お楽しみに。
特集の他にも、インタビュー「複眼で見る」やユニークな連載も盛りだくさん。「女と男の家庭科新時代」にも乞うご期待！

◎例年通り郵便振替用紙を綴じ込みました。
　98年度年間講読料6800円のお支払いにお使いください。

大沼もと子のアロマテラピー

◆アロマテラピー 90分　7000円
◆フットマッサージ 30分 3000円
＊交通費＋出張費1000円で出張もいたします。

●こんな人にオススメです
　アロマテラピーとは植物の生命力をもちいて心身を癒す方法です。
　ふだん頑張っている自分へのプレゼントに……、ストレス解消に……。リラックスしたい、リフレッシュしたいあなたを「植物の香り」は元気にしてくれます。
　あなたが必要としているオイルを直接、身体に聴いて選びます。
　気功を取り入れた「こころとからだのエステ」を体験してみませんか。

講座　イメージ・アロマテラピー **《香りのメッセージを聴く》**

　12種類の精油との出合いから自分の香りをさがします。アロマテラピーに興味はあるけれど、たくさんのオイルから自分に合ったものをどう選んでよいのか分からないと迷っている方のためのアロマレッスンです。植物の香りは心の奥底にある様々なイメージを引き出す力があります。イメージを水先案内人に「自分の香り」をさがしましょう。

◆3月22日（日）、29（日）の全2回 午後1時～3時　◆場所 フェミックス　◆定員 15名
◆参加費２回で7000円（材料費込み／10mlのブレンドオイルをお持ち帰りいただきます）
◆申込み締切り 3月20日（木）＊電話予約の上、参加費をご入金ください。参加者が５人に満たない 場合は中止になります。

●お申し込み・お問い合わせは、フェミックスカウンセリング部門まで
〒154　東京都世田谷区池尻3-2-3-703　電話 03-3424-1637/FAX 03-3424-3603
◎振込銀行：第一勧業銀行渋谷支店　普4051714　㈲フェミックス

■連載

「おんなが歳をとるということ」木村栄

「シネマの魔」武田秀夫

「変な子じゃないよね」滝野澤直子

「いきいきごんぼ」桑田良彦

「このままではいけない？」吉原令子

「蔦森樹の巡業日記」

「セックスレスなわたしたち」

「居場所考」水田宗子

■女と男の家庭科新時代

「フェンスをこえて」小平陽一

「私の家庭科ラフ・スケッチ」

「授業風景－風がかわる匂いがかわる」

「楽市楽座」加藤昭仁

「かる～い　家庭科相談室」

「共学家庭科　論争」

「オホーツクの潮風荒く」江口凡太郎

くらしと教育をつなぐＷｅ
1998年2月1日発行　第6巻第10号（通巻60号）
定価630円（本体600円）年間購読料6800円（送料共）
郵便振替　００１３０－７－７５４３１４フェミックス